

# 野方岩名隈1 藤崎12

—野方岩名隈遺跡第1次調査及び藤崎遺跡第27次調査報告書—

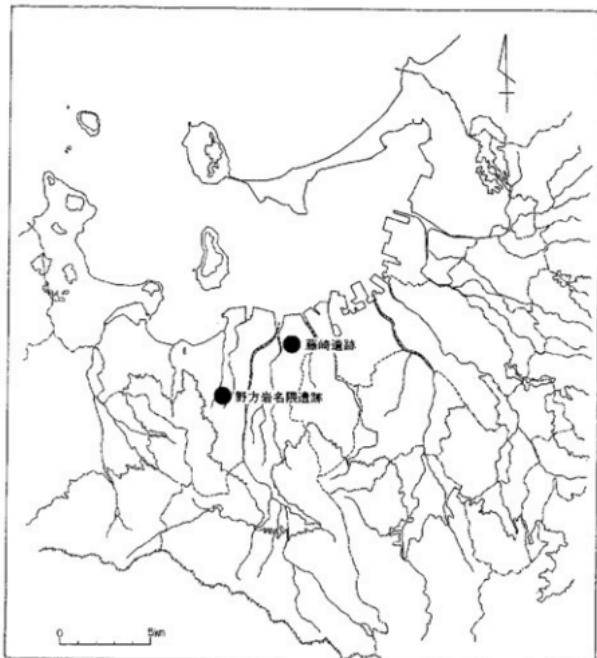


1998

福岡市教育委員会

# 野方岩名隈1 藤崎12

— 野方岩名隈遺跡第1次調査及び藤崎遺跡第27次調査報告書 —



1998

遺跡略号 NKG-1  
調査番号 9614  
遺跡略号 FUA-27  
調査番号 9629

福岡市教育委員会

# 序

「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。とりわけ、市域の西部にあたる西区には最古の王墓と呼ばれる吉武高木遺跡、環濠集落の野方遺跡など、数多くの重要な遺跡が知られています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めており、失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

今回報告する野方岩名隈遺跡は国指定史跡の野方遺跡の西側にあり、これまで発掘調査が行われたことがなかった遺跡です。今回の調査で弥生時代から古墳時代の集落跡が発見されました。

一方、藤崎遺跡は古くから知られた砂丘遺跡で、これまでにも弥生時代の豪棺墓や古墳時代の方形周溝墓などが検出されています。方形周溝墓からは前方後円墳以外では出土例がほとんどない三角縁神獣鏡が出土しており、当地が重要な地域であったことが伺うことができます。

本書は1996年度実施しました野方岩名隈遺跡第1次調査及び藤崎遺跡第27次調査の報告書です。本書が市民の皆様の文化財への認識と理解の一助となり、学術研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、医療法人博仁会 原病院様、村上要様をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成10年3月30日  
福岡市教育委員会  
教育長 町田 英俊

## 例　言

1. 本書は福岡市教育委員会がビル建設等の開発事業に伴って1996年度に実施した、野方岩名隈遺跡第1次調査及び藤崎遺跡第27次の報告書である。
2. 本書に使用する遺構実測図は菅波正人、辻節子が、遺物実測図は菅波、池崎譲二が実測した。製図は井上かおり、松浦一ノ介、林田恵三が行った。
3. 本書に使用する遺構、遺物写真は菅波が撮影した。
4. 本書に使用した座標は国土座標第II座標系である。方位は磁北で、座標北から $6^{\circ}02'$ 西偏する。
5. 本書の執筆、編集は菅波が行った。
6. 今回報告する遺構、遺物に関する記録は埋蔵文化財センターで一括収蔵、保管し、公開、活用していく予定である。

# 目 次

第 1 章 はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
第 2 章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	2
1. 遺跡の位置 .....	2
2. 周辺の遺跡 .....	2
第 3 章 野方岩名限遺跡第 1 次調査の記録 .....	5
1. 調査の概要 .....	5
2. 調査の記録 .....	7
1) 竪穴住居跡(SC) .....	7
2) 周濠 .....	17
3) その他の出土遺物 .....	17
3. 小結 .....	18
第 4 章 藤崎遺跡第 27 次調査の記録 .....	23
1. 遺跡の位置 .....	23
2. 調査の概要 .....	25
3. 調査の記録 .....	25
1) 方形周濠 .....	25
2) その他の出土遺物 .....	31
4. 小結 .....	34

# 挿 図 目 次

Fig. 1 早良平野の主な遺跡 (1/50000) .....	3
Fig. 2 野方岩名限遺跡第 1 次調査地点位置図 (1/3000) .....	5
Fig. 3 野方岩名限遺跡第 1 次調査地点構造配置図 (1/200) .....	6
Fig. 4 SC001、002遺構実測図 (1/60) .....	8
Fig. 5 SC003、004遺構実測図 (1/60) .....	9
Fig. 6 SC005、006遺構実測図 (1/60) .....	10
Fig. 7 SC030、032遺構実測図 (1/60) .....	11
Fig. 8 SC001、002出土土器実測図 (1/3) .....	13
Fig. 9 SC002出土土器実測図 (1/3) .....	14
Fig. 10 SC003～006出土土器実測図 (1/3) .....	15
Fig. 11 SC030、032及び周濠出土遺物実測図 (1/3) .....	16
Fig. 12 遺構面出土石器実測図 (1/2、2/3) .....	17

Fig.13	藤崎遺跡第27次調査地点位置図 (1/3000)	23
Fig.14	藤崎遺跡第27次調査地点造構配置図 (1/200)	24
Fig.15	方形周溝墓造構実測図 (1/100)	26
Fig.16	周溝土層及びSX001、014造構実測図 (1/40)	28
Fig.17	SX007、008、009、015造構実測図 (1/40)	29
Fig.18	周溝及びSX001、014出土遺物実測図 (1/3、1/1)	30
Fig.19	その他の出土遺物実測図 1 (1/6)	32
Fig.20	その他の出土遺物実測図 2 (1/6、1/3、1/1)	33
Fig.21	藤崎遺跡群方形周溝墓分布 (1/1500)	35

## 図版目次

PL. 1	野方岩名隈遺跡第1次調査地点全景 (東から)	18
PL. 2	竪穴住居跡分布状況 (北から)	19
PL. 3	SC001完掘 (南から)	19
PL. 4	SC002完掘 (西から)	20
PL. 5	SC004完掘 (北から)	20
PL. 6	SC005完掘 (北から)	21
PL. 7	SC030完掘 (北から)	21
PL. 8	野方岩名隈古墳周濠完掘 (北から)	22
PL. 9	野方岩名隈古墳周濠完掘 (東から)	22
PL.10	藤崎遺跡第27次調査地点出土石棺材 (東から)	37
PL.11	藤崎遺跡第27次調査地点北側全景 (西から)	37
PL.12	SX001上面遺物出土状況 (南から)	37
PL.13	SX001木棺検出状況 (東から)	38
PL.14	SX001木棺完掘 (東から)	38
PL.15	SX001木棺掘り方完掘及びP005完掘 (東から)	38
PL.16	P005柱痕跡検出状況 (南から)	39
PL.17	方形周溝墓土層堆積状況 (北から)	39
PL.18	SX007~009、014検出状況 (西から)	39
PL.19	SX007、008、014検出状況 (東から)	40
PL.20	SX007~009、014完掘 (西から)	40
PL.21	SX008検出状況 (南から)	40
PL.22	SX008検出状況 (西から)	41
PL.23	SX008完掘 (西から)	41
PL.24	SX009検出状況 (南から)	41
PL.25	SX015木棺検出状況 (北から)	42
PL.26	SX015木棺完掘 (北から)	42
PL.27	SX015掘り方完掘 (北から)	42

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

埋蔵文化財課では開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のために設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議を持って、記録保存のための調査を実施している。

野方岩名限遺跡は国史跡野方遺跡の西側の丘陵部に位置する。遺跡内には円墳が1基知られていたが、これまで発掘調査が行われておらず、遺跡の性格、範囲は不明確であった。今回の調査で、弥生時代～古墳時代の住居跡が発見され、遺跡の性格を考える上で、重要な成果が得られた。

一方、藤崎遺跡は1912（明治45）年に箱式石棺墓から三角縁二神龍虎鏡、素環頭太刀が出土したことから知られるようになった。その後も、今回の調査地点の村上氏宅では1917（大正6）年に箱式石棺から方格溝文鏡が、1930（昭和5）年に弥生時代前期の甕棺墓、副葬小壺等が発見され、当遺跡は弥生時代～古墳時代にかけての墓地遺跡として周知されるようになった。その後は1977～78（昭和52～53）年の高速鉄道に伴う調査を契機として、重点地区の一つとして、ビル建設や専用住宅建設に先立って、調査を行ってきた。その結果、発掘調査は1997年度現在、28次に及ぶ。

本書は1996年度に行われた野方岩名限遺跡第1次調査、藤崎遺跡第27次調査の2調査地点の調査報告を掲載する。

## 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査に際しては医療法人博仁会 原病院様、村上要様をはじめとした関係者の方々には条件整備等で大変御世話になりました。ここに記して謝意を表します。

調査委託	野方岩名限遺跡第1次～医療法人博仁会原病院、藤崎遺跡第27次～村上要
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 町田英俊 文化財部長 後藤直（前任） 平塚克則 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝
調査庶務	埋蔵文化財第一係長 横山邦雄（前任） 二宮忠司
調査担当	埋蔵文化財第一係 市田結香 浅原千晶（前任） 河野淳子 埋蔵文化財第一係 菅波正人
調査作業	加島定次郎 栗木和子 坂本ハツ子 辻節子 徳永洋二郎 鳥井原良治 原美晴 船越恒夫 堀本歳四郎 松本みつ子 三谷朗子 横尾泰広 吉川順岳
整理補助	井上かおり
整理作業	山田順子 田中安恵

調査番号	9614	遺跡略号	NKG 1	分布地図104	調査番号	9629	遺跡略号	FUA27	分布地図081
所在地	西区野方7丁目768-1他				所在地	早良区藤崎1丁目21-1			
調査対象面積	886m <sup>2</sup>	調査面積	800m <sup>2</sup>		調査対象面積	1024m <sup>2</sup>	調査面積	300m <sup>2</sup>	
調査期間	1996年6月11日～7月18日				調査期間	1996年8月20日～9月17日			

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の位置

福岡市の西側に位置する早良平野は、東側を平尾丘陵、南側を背振山系、西側を背振山から派生した叶ヶ岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、大部分は室見川と西から十郎川、名柄川、金屑川等の沖積作用によって形成されたものである。また、室見川の河口には愛宕山、施原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の回流作用によって、生ノ松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代においてはラグーンをなしていたと考えられる。

野方岩名隈遺跡は早良平野の西側の飯盛山・叶ヶ岳から派生する扇状地の上に立地する。国土地理院刊行の1/50000の地形図「福岡」では、図幅上端から24.5cm、左端から10cmの位置にある。

藤崎遺跡は室見川河口右岸の砂丘上に立地する。国土地理院刊行の1/50000の地形図「福岡」では、図幅上端から19.5cm、左端から18.5cmの位置にある。

### 2. 周辺の遺跡

早良平野の遺跡は地形的に見ると、海岸線の砂丘上、室見川及び十郎川、金屑川流域の沖積微高地、油山から北西に派生する低丘陵、背振山から北に派生する西山、飯盛山、叶ヶ岳の東側台地等に分布する。ここでは弥生時代から古墳時代の遺跡について概観する。

砂丘上の遺跡では藤崎遺跡の東側に隣接して西新町遺跡がある。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡、甕棺墓が数多く検出されている。遺物では弥生時代中期の甕棺墓からはゴホウラ製貝輪や銅劍の切先等が出上している。また、弥生時代終末から古墳時代前期にかけては畿内系、山陰系の搬入土器や半島産の陶質上器、大型板状鉄製品等が出土しており、国内外の各地との盛んな交流を伺うことができる。姪浜遺跡では弥生時代中期を主体とした堅穴住居跡、甕棺墓が検出され、漢式三角鏡、半島系無文土器、南海産の貝輪未製品、貝矢、西部瀬戸内系の搬入土器等が出土している。遺跡の主体の時期は異なるが、西新町遺跡同様、対外交流に深く関わったことを示している。砂丘南側の独立丘陵上にある五島山古墳では箱式石棺から二神二獸鏡、鉄劍、銅鏡等が出土している。

室見川流域の遺跡では東岸の独立中位段丘上有田遺跡群がある。有田遺跡群は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、早良平野の撫点的集落の一つである。特に弥生時代初頭には環濠が掘削され、以後、古墳時代にかけて連続と集落は形成される。また、細形銅劍、銅戈、前漢鏡、小型徹製鏡等を副葬した甕棺墓も検出されている。一方、古墳時代後期から奈良時代にかけては柵や溝に区画された大型の倉庫群が各所に営まれており、官衙的施設の存在が指摘されている。

室見川東岸流域の沖積微高地では北から田村遺跡群、四箇遺跡群、重留遺跡群、東入部遺跡群等が分布する。これらは遺跡群全体で見ると、縄文時代から中世にかけて集落が連続と形成されている。弥生時代では前期前半の段階には甕棺墓や堅穴住居跡等が見られる。田村遺跡群では5次調査で弥生時代前半の大型壺形土器を棺に使用した甕棺墓地が検出されている。同期の甕棺墓地は重留遺跡群、東入部遺跡群でも検出されている。また、重留遺跡群では1次調査で前期前半期の松葉型・タケ型の堅穴住居跡からなる居住域が検出されている。これらはいずれも前期前半の短い時期に形成されたもので、連続と継続するものではなく、前期段階では存続時期の短い集落が点在していたことを伺うことが

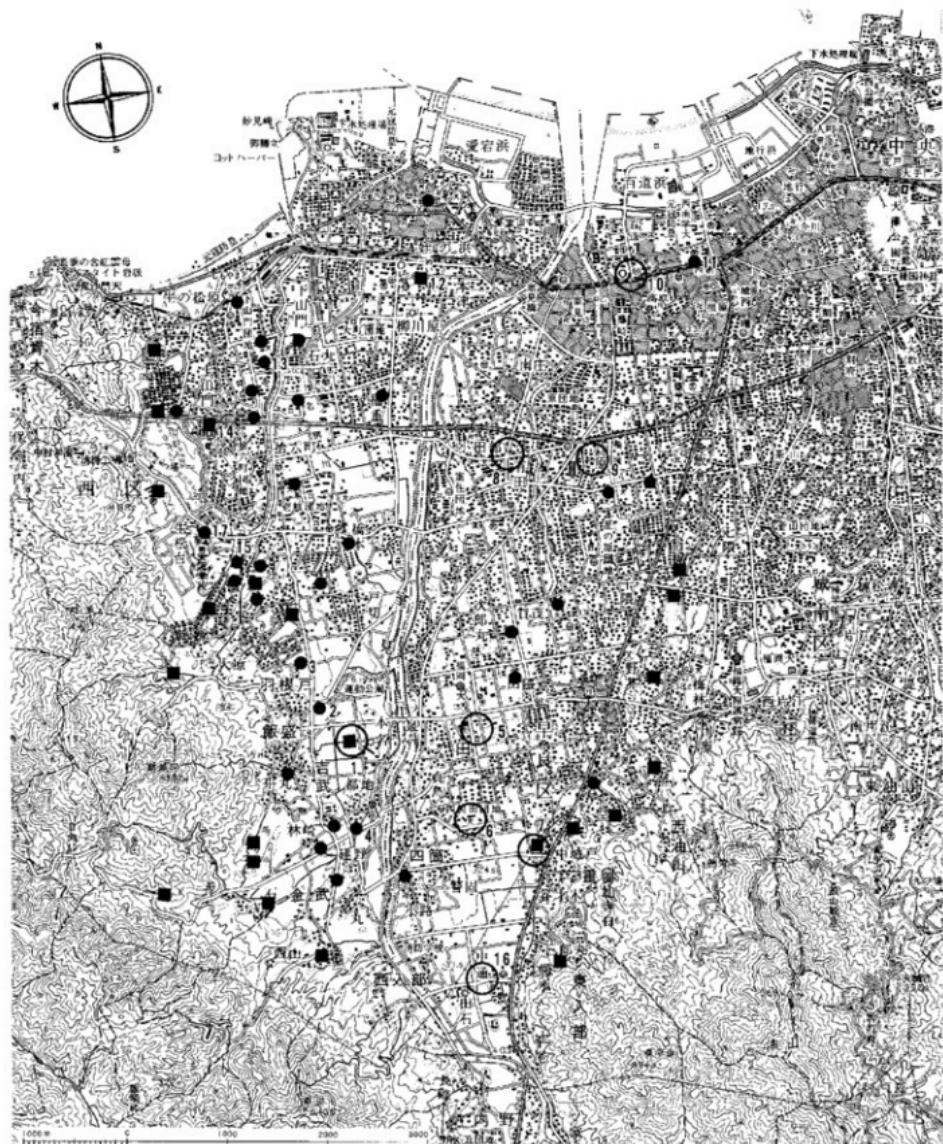


Fig. 1 早良平野の主な遺跡 (1/50000)

- |         |         |             |            |
|---------|---------|-------------|------------|
| 1 吉武遺跡群 | 6 四箇遺跡群 | 11 西新町遺跡    | 16 東入部遺跡群  |
| 2 太田遺跡  | 7 拝塚古墳  | 12 五島山古墳    | 17 野方岩名勝遺跡 |
| 3 羽根戸遺跡 | 8 有田遺跡群 | 13 梶六町ツイジ遺跡 | (○) 遺跡群    |
| 4 郡地遺跡  | 9 原遺跡群  | 14 宮ノ前遺跡    | (●) 遺跡     |
| 5 田村遺跡群 | 10 藤崎遺跡 | 15 野方遺跡     | (■) 古墳     |

できる。その中で、東入部遺跡群では2次調査で前期後半から後期初頭にかけての覆棺墓、木棺墓、土壙墓が検出され、木棺墓、覆棺墓から細形銅劍、銅鉗、鉄刀等の副葬品が出土している。当該地域での有力集団の存在が指摘されている。古墳時代では重畠遺跡群で前方後円墳が見られる。押塚古墳は全長75mを測り、鍵形の周濠が巡る。墳丘の大半は削平されているが、周濠には8ヶ所に陸橋がつく。また、周濠内から、円筒埴輪、壺形埴輪、形象埴輪（武人）、器材埴輪（家形、楯形等）が多数出土している。築造の時期は5世紀前後と考えられている。この古墳の南側数百mには方形周溝墓群が営まれている。早良平野に押塚古墳以前は首長墓と言える前方後円墳は見られず、その出現の要因については畿内勢力の進出等が考えられている。

室見川東岸の飯倉丘陵上では古状部単位にAからH群に分けられた飯倉遺跡群がある。早くから宅地化が進んだため、遺跡群の全体像は不明確であるが、飯倉C遺跡（飯倉唐木遺跡）ではこれまでに弥生時代前期から中期末の覆棺墓が検出され、覆棺墓から細形銅劍、素環頭太刀等が出土している。また、飯倉G遺跡では1次調査で、弥生時代の小型彷製鏡を副葬した木棺墓が検出されている。飯倉F遺跡でも銅鏡片が出土しており、この地域にも有力集団が存在していたことを伺うことができる。一方、飯倉D遺跡では1次調査で、弥生時代後期後半以降の堅穴住居跡から小型彷製鏡と銅矛の鋒型が出土しており、青銅器製作の工房と考えられている。古墳時代では油山から飯倉丘陵西側にかけては多くの群集墳が存在するが、これらに先行する形で、小型の前方後円墳が築造される。クエゾノ1号墳は全長22~25mの5世紀中頃の前方後円墳で、埋葬主体は2基で、箱式石棺と刳り貫きの木棺である。墳丘には半島産の陶質土器の大甕が埋設される。近接する後続の円墳の5号墳からは鉄鋸、鉄穂等の鍛冶道具が出土している。被葬者として半島との繋がりの強い集団が想定されている。梅林古墳はクエゾノ1号墳の北側約500mにあり、5世紀末に築造された全長約27mの前方後円墳で、横穴式石室から須恵器、土師器、馬具、鐵鎌、鑿等が出土している。

室見川西岸から十郎川流域にかけての沖積地では集落や墳墓遺構の検出例は少ないが、拾六町平田遺跡、石丸古川遺跡、拾六町ツイジ遺跡、橋本遺跡では縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけての多量の土器と共に、大陸製磨製石器等が出土している。該期の明確な水田造構はまだ発見されていないが、初期段階の低湿地域での水田経営の一端を伺うことができる。

飯盛山から叶ヶ岳にかけての西側台地では多くの集落遺跡、墳墓遺跡が見られる。宮ノ前遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓群が検出されている。野方中原遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落群と墓地群が検出されている。弥生時代後期では大小の円形（90×110m以上）と方形プラン（25×30m）の環濠が掘削される。円形環濠の内部には多数の堅穴住居跡が、方形環濠の内部には掘立柱建物が3棟検出され、弥生時代の環濠集落の展開を考える上で重要な資料として捉えられている。古墳時代においても100軒を越す堅穴住居跡が検出され、箱式石棺から獸面鏡や内行花文鏡、勾玉等が出土している。野方中原遺跡の東側にある野方久保遺跡では弥生時代前期末から中期末の覆棺墓が多数検出されている。2次調査では覆棺墓から細形銅劍、把頭鉗、鐵鎌等が出土している。吉武遺跡群は旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。弥生時代では多錐細文鏡、細形銅劍、銅矛、銅戈、勾玉等を副葬した木棺墓や覆棺墓が検出された吉武高木遺跡、墳丘墓が検出された吉武樋渡遺跡等の存在は「早良王墓」と呼ばれるように当該地域に大きな勢力があったことが示している。一方で、金武や西山の丘陵上の浦江谷遺跡、長峰遺跡でも小規模の覆棺墓地が形成される。古墳時代では弥生時代中期の墳丘墓を利用して、5世紀中頃の帆立貝式の樋渡古墳が築造される。また、陶質土器や初期須恵器を副葬した古墳も多数検出されている。半島との強い繋がりを伺うことができる。後期の群集墳では山麓部の羽根戸、金武地区には300基を越す古墳が分布する。

## 第3章 野方岩名隈遺跡第1次調査の記録

### 1. 調査の概要

本調査地点は、西区野方7丁目768-1他に所在する。遺跡は早良平野の西側の飯盛山・叶ヶ岳から派生する扇状地の上に立地する。これまで本遺跡で発掘調査が行われたことはなく、円墳（野方岩名隈古墳）が知られるのみであった。周辺の遺跡では東側約300mに国史跡の野方遺跡がある。野方遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落と墓地が検出されている。また、弥生時代後期の円形、方形の大小の環濠があり、弥生時代の環濠集落の変遷を考える上で重要な資料となっている。更に東側の十郎川右岸の野方久保遺跡では弥生時代の甕棺墓、竪穴住居跡が検出されている。第2次調査では甕棺墓から細形銅劍、把頭飾、鐵鍼等が出土している。

今回、医療法人博仁会原病院の病棟増築に先立って現況の山林を試掘調査し、古墳周濠、弥生時代～古墳時代の住居跡を確認した。協議の結果、建築予定地は造成を伴うため、全域を調査対象として調査を行うこととなった。調査は約30cmの表土を除去した後に行った。表土を除去すると、淡黄灰色粘質土となり、その面で造構の検出作業を行った。造構面の標高は約25mである。

造構は弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡8軒、古墳時代後期の円墳の周濠等を検出した。遺物は竪穴住居跡から弥生土器、上師器等が出土した。また、造構面の淡黄灰色粘質土から石鐵、スクレーパー、磨製石斧等が出土した。調査は1996(平成8)年6月11日～7月18日まで実施した。調査面積は800m<sup>2</sup>である。

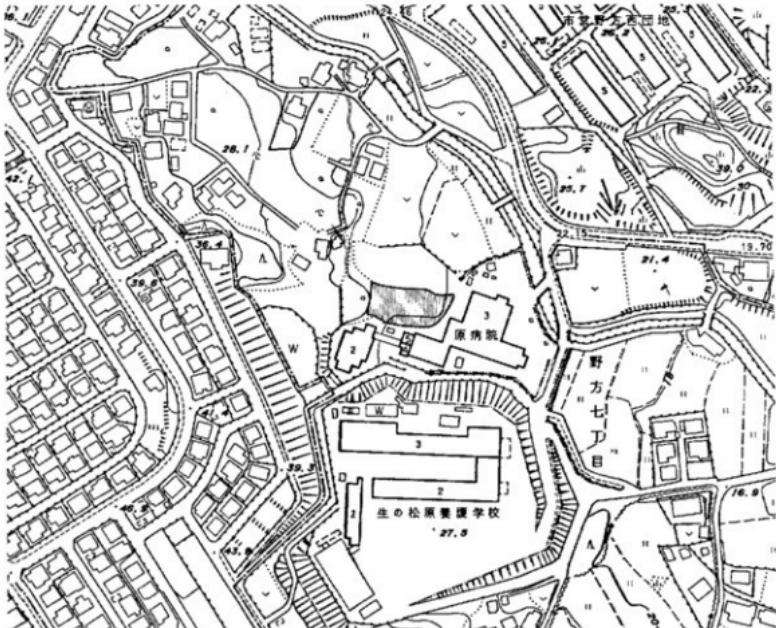




Fig. 3 野方岩名限遺跡第1次調査地点造構配図 (1/200)

## 2. 調査の記録

### 1) 壇穴住居跡 (SC)

今回の調査では8軒の壇穴住居跡を検出した。住居跡は調査区全域に分布する。SC-001と002、SC-005と006、SC-030と032は切り合っている。平面形は方形もしくは長方形を呈する。これらの壇穴住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられるものである。

#### SC001 (Fig. 4)

調査区中央北側に位置し、SC-002に切られる。造構の東側は搅乱をうけているが、平面形は方形を呈し、1辺約5.7m程の規模が推測される。深さ5cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等が出土した。時期は弥生時代後期中頃から後半に位置づけられる。

**出土遺物 (Fig. 8-1~4)** 1、2は甕である。口縁はくの字形を呈し、内面に明瞭な稜がつく。底部は欠損している。外面の調整はハケメを施す。3は無頸甕である。口縁は緩やかに外反する。外面の調整はヘラミガキが施される。器面には赤色顔料が塗布される。4は甕の底部である。やや丸みを帯びた平底である。

#### SC002 (Fig. 4)

調査区中央北側に位置し、SC-001を切る。平面形は長方形を呈し、長軸6m、短軸5.2m、深さ0.2mを測る。主柱穴は2本で、径約60cm、深さ40cmを測る。住居跡の北側から東側にかけてと南側にベッド状造構がつく。遺物は床面で上師器甕、壺、器台等が出土した。時期は古墳時代前期に位置づけられる。

**出土遺物 (Fig. 8, 9-5~14)** 5~10は布留式の甕である。口縁はくの字形を呈する。端部は丸く仕上げるもの(5)、面取りするもの(6、9、10)、内側に摘み上げるもの(8)がある。体部はやや長胴である。6は体部上位にヘラ描きの沈線が巡る。外面調整はハケメ、内面はヘラケズリが施される。11在地の甕で、口縁はくの字形を呈し、体部は下膨れである。外面の下半には叩きが施される。内面はナデである。全体に歪んでいる。12は高環脚部である。筒状を呈し、裾部は緩やかに開く。13は台付きの体である。14は器台である。体部の上位でくの字形に折れ、底径は口徑を上回る。体部の下半には叩きが施される。器高17cm、口径10.4cm、底径15.8cmを測る。

#### SC003 (Fig. 5)

調査区中央南側に位置する。造構の南側は削平される。平面形は方形を呈し、4.6m×3.9mを測る。深さ30cmが残存する。主柱穴は2本と考えられるが、南側の柱穴は大きく、土坑の可能性もある。径70、120cm、深さ10、90cmを測る。遺物は埋土から弥生土器甕、高環等が出土した。時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

**出土遺物 (Fig. 10-15~18)** 15は甕である。口縁は直立気味にくの字形に折れ、体部は長胴である。内外面とも調整はハケメを施す。16~18は高環である。16は环部で、中位で反転して緩やかに外反する。外面には暗文が施される。17は脚部で、筒状を呈し、裾部で緩やかに開く。裾部には円形の透かしが穿たれる。

#### SC004 (Fig. 5)

調査区西側に位置し、古墳の周濠に切られる。平面形は長方形を呈し、長軸長5.6m以上、短軸長4.5m、深さ30cmを測る。主柱穴は2本で、径60cm、深さ50cmを測る。中央には火ががあり、長軸長103cm、短軸長60cm、深さ15cmを測る。住居跡の北側と東側と西側にベッド状造構がつく。南側には入り口の

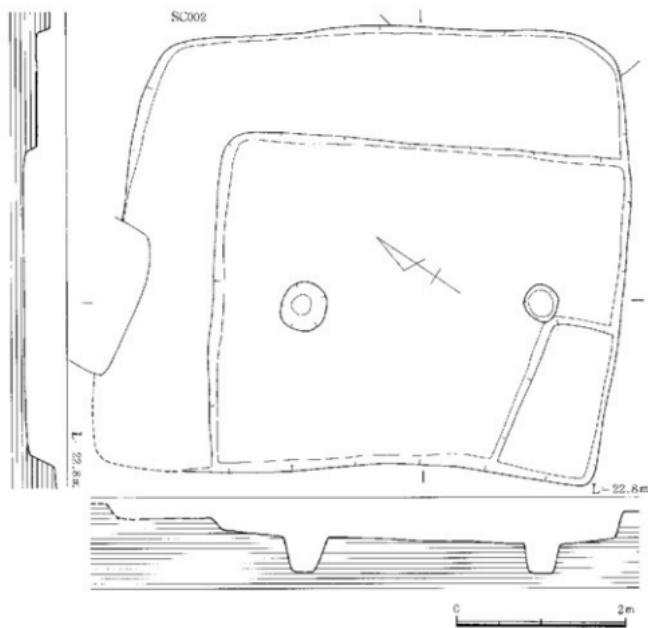
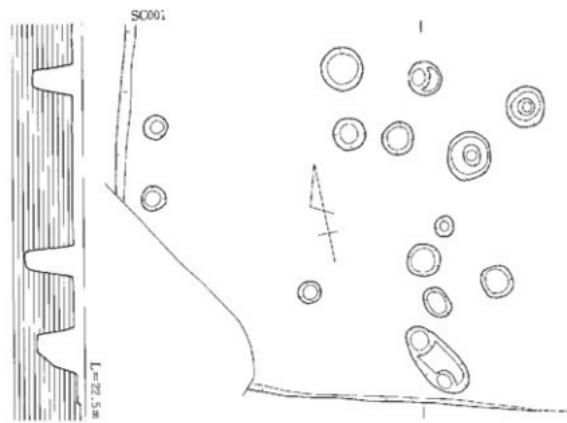


Fig. 4 SC001、002遺構実測図 (1/60)

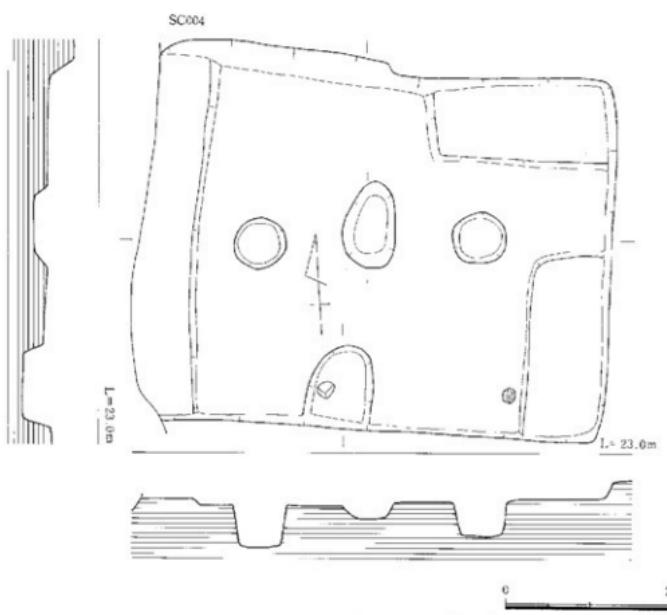
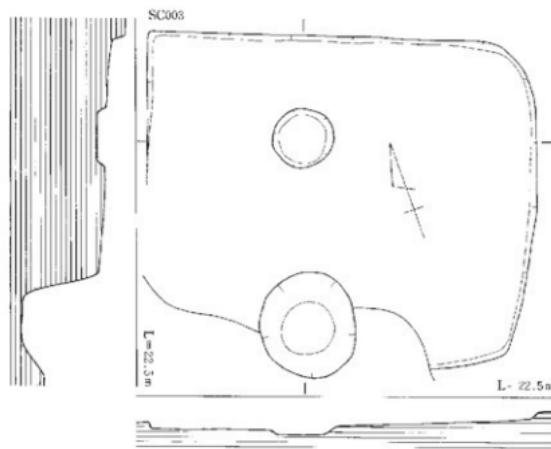


Fig. 5 SC003, 004造構実測図 (1/60)

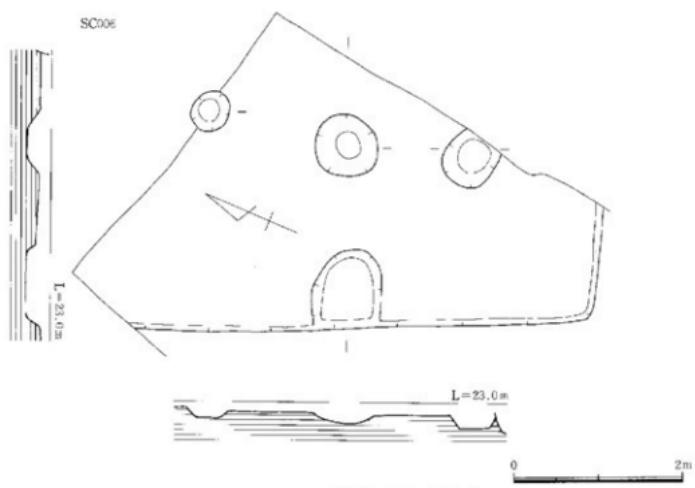
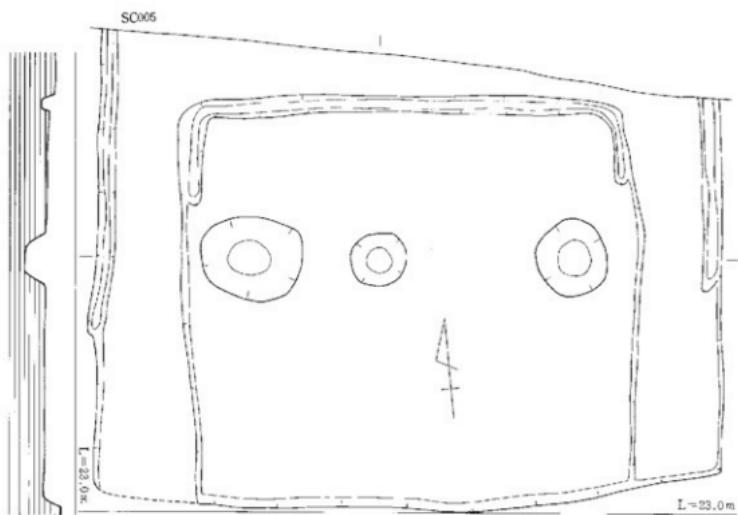


Fig. 6 SC005、006造構実測図 (1/60)

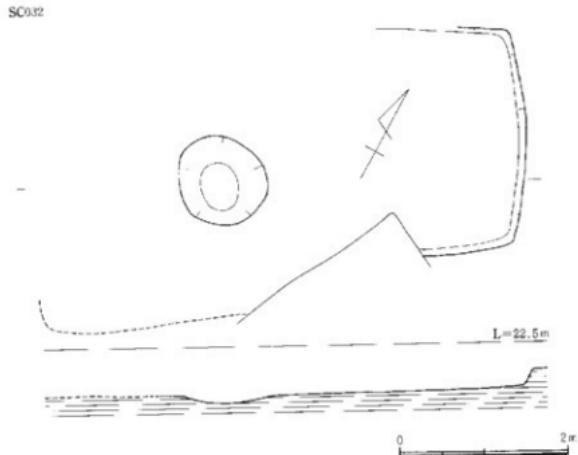
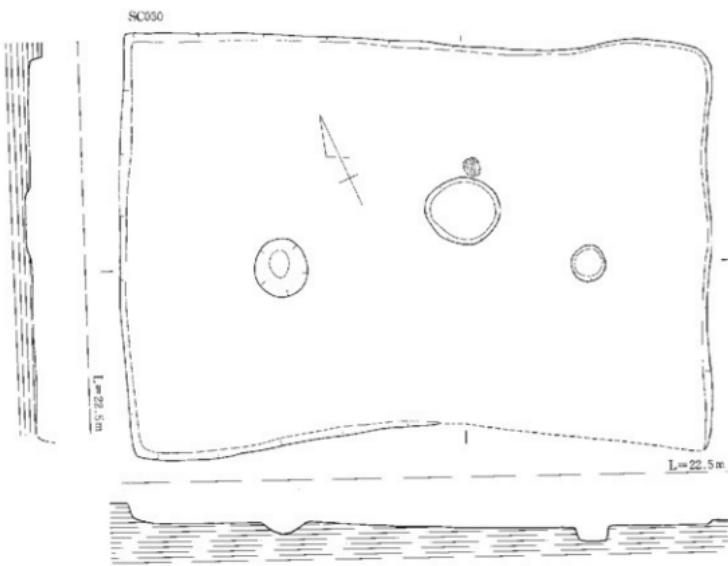


Fig. 7 SC030、032造構実測図 (1/60)

施設と考えられる土坑がつく。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等出土した。また、住居跡の東側の床面に赤色顔料の分布が見られた。時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

**出土遺物** (Fig. 10-19~21) 19は甕である。底部は欠損している。口縁は直立気味に緩やかに外反し、体部は丸みをもつ。調整は内外面ともハケメが施される。20は壺底部である。底部は痕跡的な平底を呈する。21は直口壺である。底部は欠損している。調整は内外面ともハケメである。

#### SC005 (Fig. 6)

調査区西側に位置し、SC-006を切る。造構は調査区外に広がる。平面形は長方形を呈し、長軸長7.4m、短軸長5.6m、深さ20cmを測る。主柱穴は2本で、径85~120cm、深さ75cmを測る。中央には炉があり、長軸長75cm、短軸長60cm、深さ23cmを測る。住居跡の北側と東側と西側にベッド状造構がつき、壁溝が巡る。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等が出土した。時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

**出土遺物** (Fig. 10-22~24) 22は複合口縁壺の口縁である。口縁上半は内湾する。23は壺の頭部である。断面三角形の突帯がつく。24は器台である。口縁は緩やかに外反する。端部にはハケメ原体によって刻目が施される。

#### SC006 (Fig. 6)

調査区西側に位置し、SC-005に切られる。平面形は長方形を呈し、長軸長6.2m以上、短軸長3.8m以上、深さ10cmを測る。主柱穴は2本で、径45~60cm、深さ15cmを測る。中央には炉があり、長軸長75cm、短軸長70cm、深さ15cmを測る。南側には入り口の施設と考えられる土坑がつく。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等が出土した。時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

**出土遺物** (Fig. 10-25~28) 25はくの字形を呈する甕口縁である。26は壺頭部で、断面三角形の突帯がつく。27は広口壺で、口縁内面は段がつく。28は手捏ね土器の鉢である。

#### SC030 (Fig. 7)

調査区東側に位置し、SC-032を切る。平面形は長方形を呈し、長軸長7m、短軸長5m、深さ25cmを測る。主柱穴は2本で、径65cm、深さ15cmを測る。中央には炉があり、長軸長90cm、短軸長80cm、深さ5cmを測る。炉の脇には粘土の塊が見られた。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等が出土した。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

**出土遺物** (Fig. 11-29~37) 29、30はくの字形口縁を呈する甕である。体部は長胴である。外面の調整はハケメである。31は広口壺である。口縁は緩やかに外反する。頭部には断面三角形の突帯がつく。32は複合口縁壺である。口縁はくの字形に屈曲する。33~35は小型の鉢である。33の口縁は緩やかに外反する。34の口縁は直線的に開き、底部は平底である。35は尖り気味の底部で、外面に叩きが見られる。36は台付きの鉢である。37は器台で、口縁は短く、底部は緩やかに開く。口縁端部と外面には叩きが施される。器高9.4cm、底径10cmを測る。

#### SC032 (Fig. 7)

調査区東側に位置し、SC-030に切られ、西側は削平をうけている。平面形は長方形を呈すると考えられる。長軸長5.8m以上、短軸長2.7m以上、深さ20cmを測る。中央には土坑があり、長軸長105cm、短軸長100cm、深さ8cmを測る。遺物は埋土から弥生土器甕、壺等が出土した。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

**出土遺物** (Fig. 11-38~42) 38はくの字形口縁を呈する甕である。内面には明瞭な稜がつく。39はやや丸みを帯びた底部である。40は高壇の壊部で、上位で反転にして、口縁は緩やかに外反する。41、42は鉢である。口縁は直線的に開く。42の底部はやや丸みを帯びた平底である。

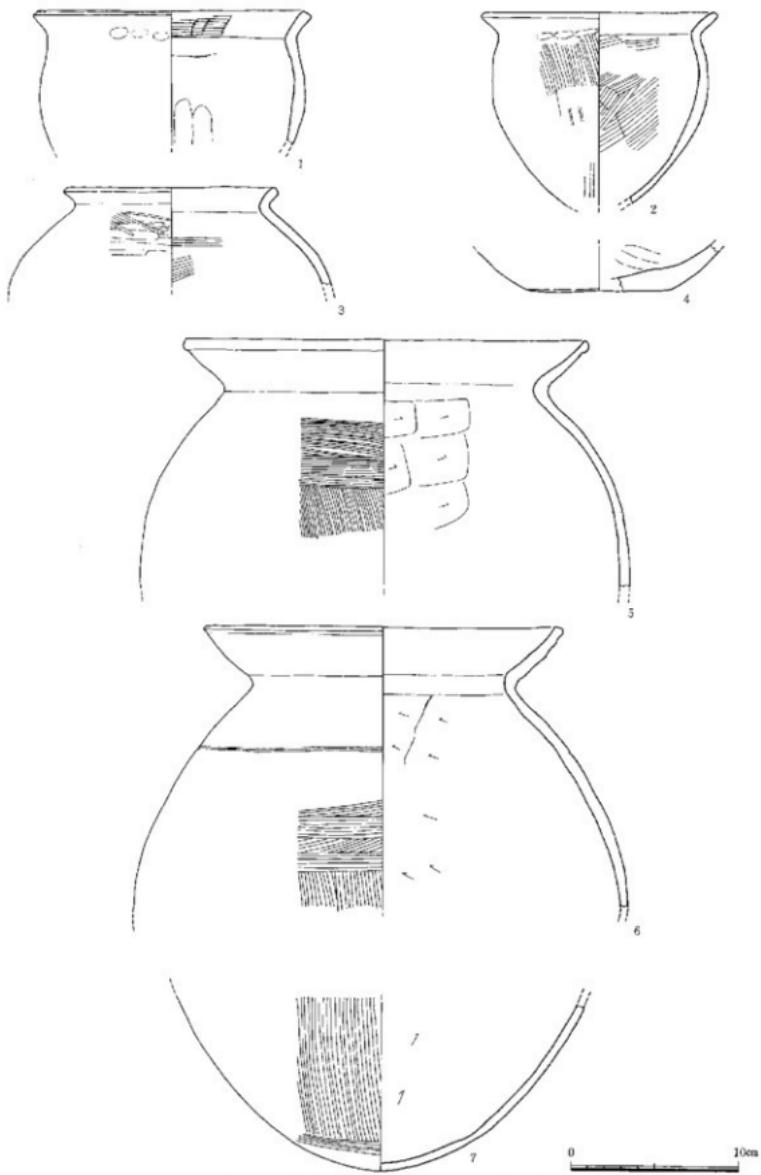


Fig. 8 SC001、002出土土器実測図 (1/3)

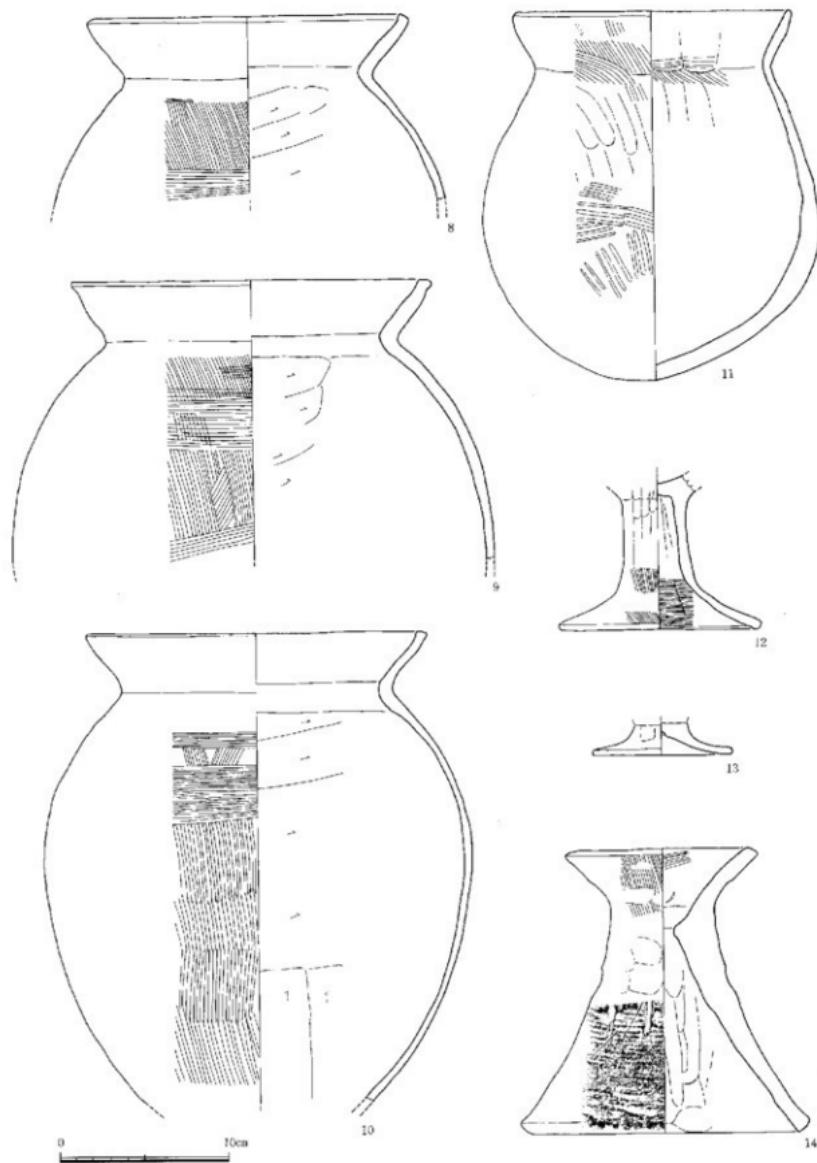


Fig. 9 SC002出土土器実測図 (1/3)

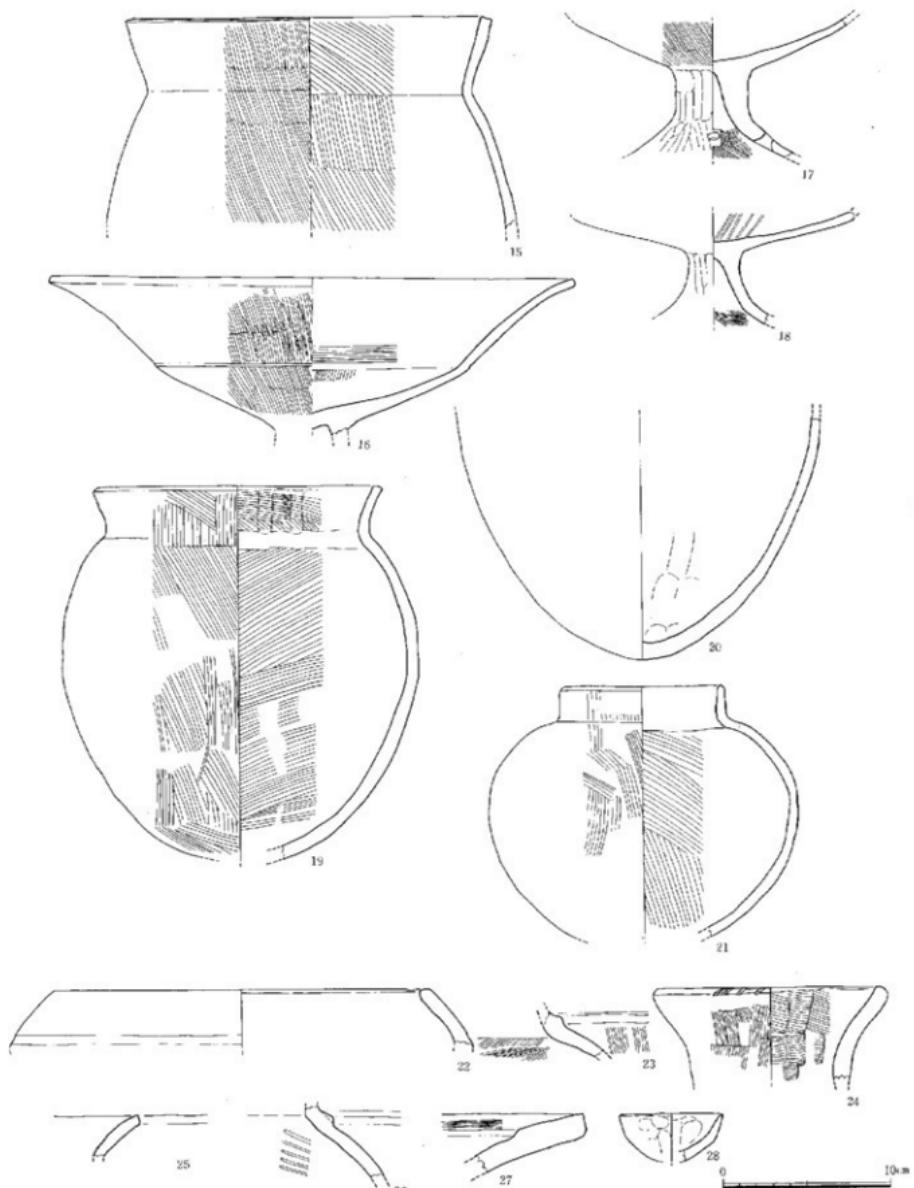


Fig.10 SC003~006出土土器実測図 (1/3)

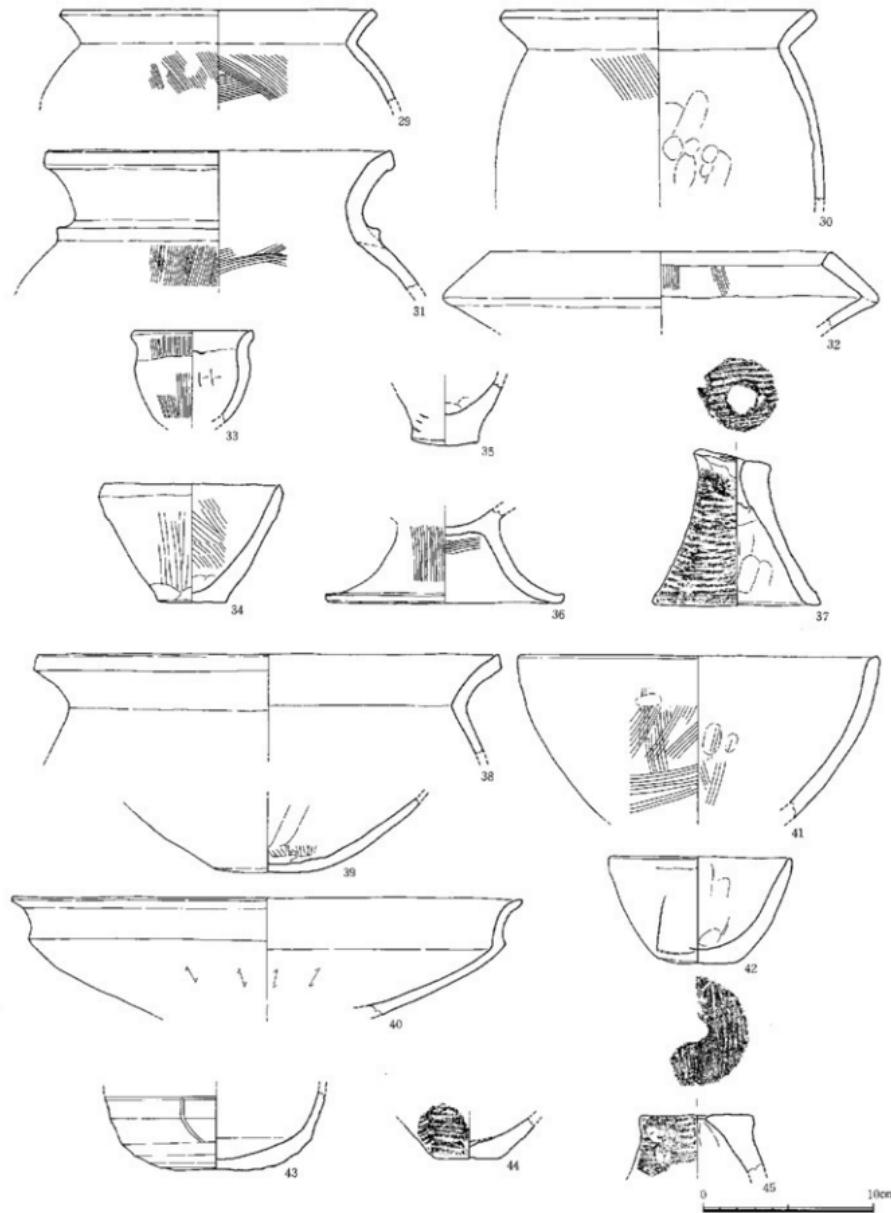


Fig.11 SC030、032及び周辺出土遺物実測図 (1/3)

## 2) 周濠

今回の調査では野方岩名隈古墳の周濠の一部を検出した。墳丘は調査区の西側に隣接する。石室は横穴式石室で、天井石が抜き取られている。周濠はSC004を切る。幅3~3.5m、深さ0.5mを測る。周濠の埋土は暗褐色粘質土である。周濠から復元される古墳の径は約14mと推測される。

出土遺物 (Fig.11~43~45) 43は須恵器壺である。底部には回転ヘラケズリが施される。体部にはヘラ記号が見られる。44は外来系の甕底部である。小さな平底で、外面には叩きが施される。45は器台で、外面には叩きが施される。

## 3) その他の出土遺物

46~48は調査区東側の造構面から出土した縄文時代の遺物である (Fig.12)。46は磨製石斧である。基部は欠損後に調整をしている。石材は粘板岩質砂岩である。現存長10.5cm、幅5.6cm、厚さ2.3cmを測る。47はスクレーバーである。主要剥離面側に丁寧な調整剝離が施される。石材は古銅安山岩である。現存長8.6cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmを測る。48は凹基無茎式の打製石鎌である。抉りは深い。石材はチャートである。現存長3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmを測る。

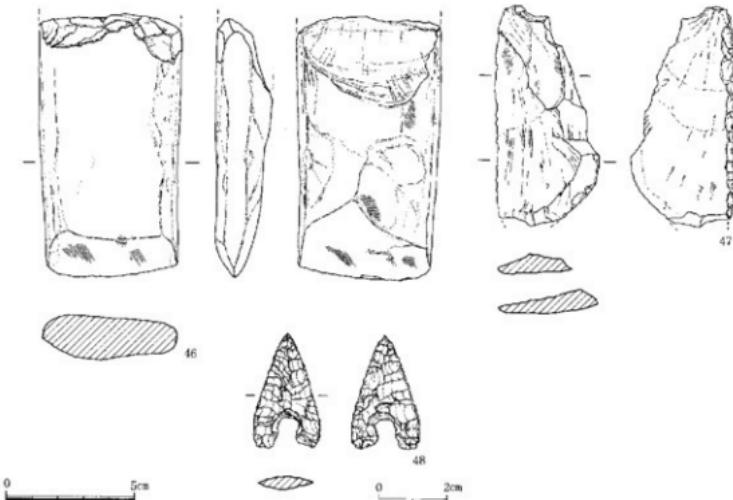


Fig.12 造構面出土石器実測図 (1/2, 2/3)

### 3. 小結

今回の調査では弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡7軒、古墳時代後期の円墳の周濠等を検出した。ここでは調査成果を概述していく。

堅穴住居跡は時期的には大きく3時期に分けられ、弥生時代後期後半(SC001、030、032)、終末(SC003~006)、古墳時代前期前半(SC002)となる。住居の平面形は長方形プランを呈し、主柱穴は2本である。壁際にはベッド状構造をもつものがあるが、全周巡るものはない。遺物は弥生土器、土師器等があるが、鉄製品等はほとんど出土していない。今回の調査では集落の範囲を確定するには至らないが、遺跡の立地は北西から延びてくる丘陵の先端斜面に立地し、北側は東に開口する谷部となる。地形的な条件を考慮すると、大規模な集落は想定しがたい。集落の存続幅は本遺跡の東側に位置する野方中原遺跡や野方久保遺跡と一致する。しかし、野方中原遺跡では後期の環濠や数百に及ぶ古墳時代前期の堅穴住居跡、銅鏡を副葬した箱式石棺墓等が検出されている。また、野方久保遺跡では中期段階では銅剣や把頭飾等を副葬した巻柏墓が、後期では堅穴住居跡から多くの鉄製品(鉄斧、鉄鎌)、銅製品(銅鏡)が出土している。これらの遺跡と本遺跡を比較すると、集落構造、出土遺物に格差があるのは否めない。両者の関係には拠点集落の拡大に伴う、水田開発地を求めての集落の拡散という状況を垣間見ることができよう。



PL. 1 野方岩名隈遺跡第1次調査地点全景（東から）



PL. 2 竪穴住居跡分布状況（北から）



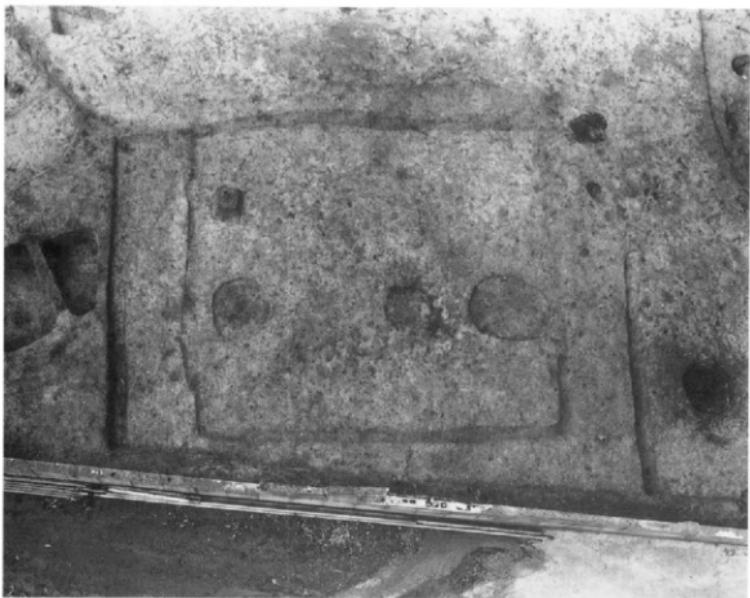
PL. 3 SC001完掘（南から）



PL. 4 SC002発掘（西から）



PL. 5 SC004発掘（北から）



PL. 6 SC005完掘（北から）



PL. 7 SC030完掘（北から）



PL. 8 野方岩名隈古墳周濠完掘（北から）



PL. 9 野方岩名隈古墳周濠完掘（東から）

## 第4章 藤崎遺跡第27次調査の記録

### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、早良区藤崎1丁目21-1に所在し、藤崎遺跡の北西端にある。東側は猿田彦神社が隣接する。この地点はこれまでに大正~昭和初期にかけて方格溝文鏡や鏡棺墓などが発見され、藤崎遺跡第2地点として周知されている。これらの成果は先学によって報告、考察が行われているが、今回の調査との関連もあり、ここでも簡単に概略を記述しておく。

1917(大正6)年、方格溝文鏡を副葬した箱式石棺墓が発見された。中山平次郎氏の報告によると、箱式石棺墓及び銅鏡は「出土状況は比所の地を穿った際地下12尺許の處に平石を以て囲んだ細長き箱様の構作物（長さ1間許、幅1端に於て2尺許り、他端に於て1尺許）を偶然掘り當て、比石及其内部にあった土を掘り除く際に鍬先にかかって発見された」もので、石棺の石質は玄武岩質の平石で、棺内には朱が付着していたとされる。また、箱式石棺墓は「久しい以前にも同様の平石を以てした構作物を掘出した事があったといふ」とあり、他にも箱式石棺墓が存在していたことが伺われる。

1930(昭和5)年、土取り作業中に箱式石棺墓、鏡棺、弥生土器が多数出土している。永倉松男、鏡山猛氏の報告によると、現地表から2尺ないし3尺下方の砂層で、敷地の北東隅で弥生土器、鏡棺を含む包含層が、その南西で箱式石棺墓が出土したとされる。箱式石棺墓は東西方位で、「地表下3尺6寸の所に存し、内法長さ2尺3寸、幅中央で6寸、深さ6寸5分、垂直面との差は1寸1分」で、「室内は所謂朱結の状態となされ、遺物は存しなかった」とされる。鏡棺は工事の際に他に搬出され

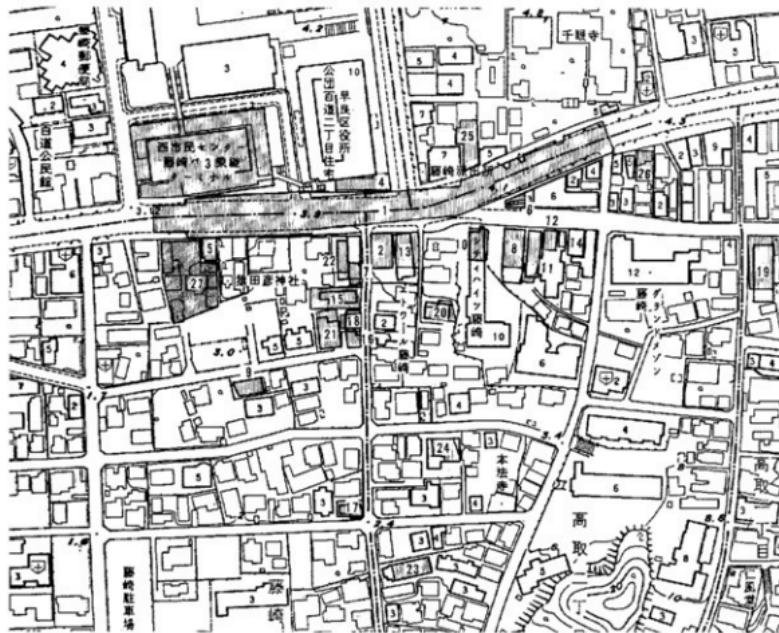


Fig. 13 藤崎遺跡第27次調査地点位置図 (1/3000)

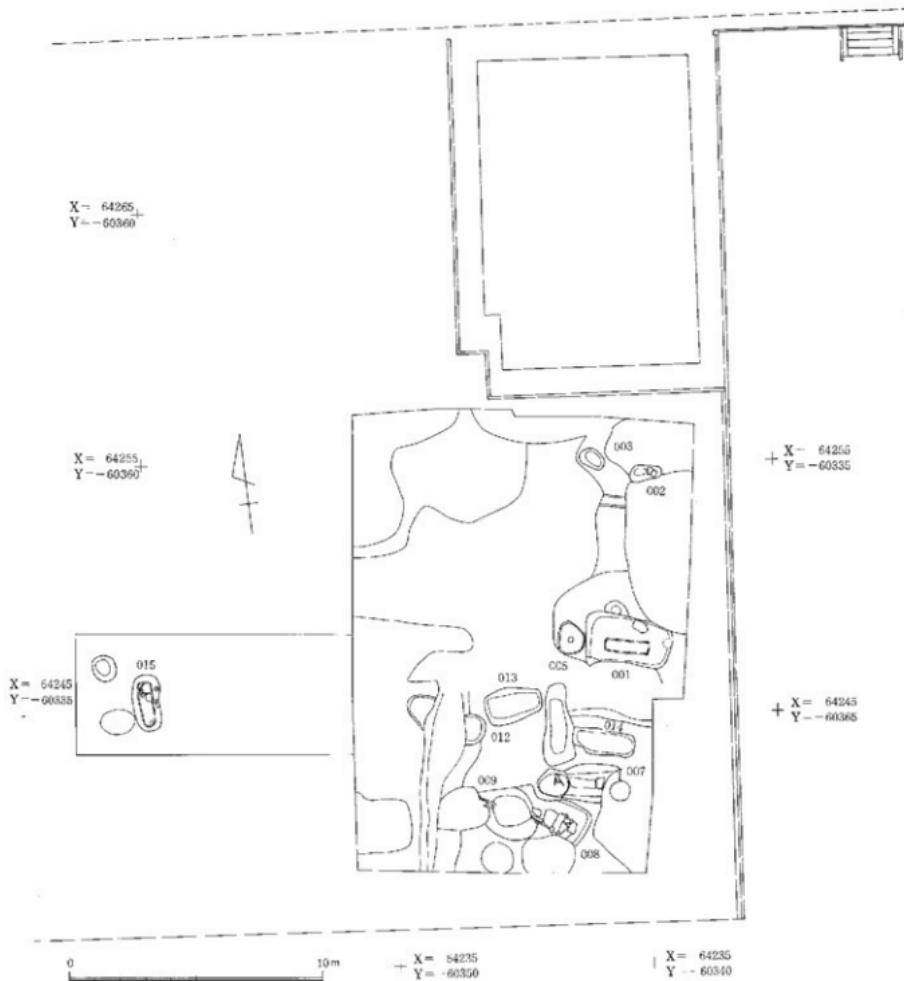


Fig. 14 藤崎遺跡第27次調査地点造構配置図 (1/200)

て完形の1基を除いて、形態は不明である。鏡山氏のその後の聞き取りなどの追補によると、甕棺は合わせ甕で、6ないし7対あったとされる。甕棺は東西に横たえられた状態で、この甕棺に副えられて9個の壺が安置されていたとある。1基あった完形の甕棺は森本六爾氏の実測図によると、器高49cmを測り、口縁外面は肥厚し、肩部に段を持つ壺形土器である。口縁端部は打ち欠いているようである。形態の特徴から板付II式の古い段階に位置づけられるものである。副葬の小壺は有袖の羽状文や山形文を持つ有文土器で、板付I式からII式に位置づけられるものである。

## 2. 調査の概要

平成5年度、当該地でのビル建設設計画の申請をうけて、試掘を行った。当初、これまでの地下げなどによって遺構は既に破壊されたと考えられたが、試掘の結果、申請地の東側で古墳時代の溝等を検出した。その後、平成7年度、店舗兼立体駐車場建設が具体化した。協議の結果、遺跡の現状保存は無理と判断され、遺構が確認された東側を中心に発掘調査を行った。

調査は約30~50cmの表土を除去した後に行った。表土下はすぐに、黄灰色砂となり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面に以前の工事や廃棄土坑による搅乱が著しく、包含層や遺構が遺存しているところはほとんどなかった。廃棄土坑の中からは石棺墓の棺材と考えられる玄武岩の板石が多量に出土した。先述のとおり、この地点ではこれまでの工事で箱式石棺墓が数基発見されており、これらの板石はそれらの棺材と考えられる。遺構面の標高は約2.5~2.9mを測る。

遺構は古墳時代初頭の方形周溝墓1基、木棺墓1基等を検出した。遺物は方形周溝墓から上師器、銅鏡等が出土した。また、廃棄土坑から甕棺と考えられる大型の壺形土器が多量に出土した。調査は1996(平成8)年8月20日~9月17日まで実施した。調査面積は300m<sup>2</sup>である。

## 3. 調査の記録

### 1) 方形周溝墓

今回の調査では1基の方形周溝墓を検出した(Fig. 15)。遺構は以前の工事による搅乱のため、遺存状況は極めて悪い。遺構の方位はほぼ磁北方向をとる。

周溝は西辺と北辺を検出した。東辺と南辺は調査区外に延びる。西辺は7m分検出した。北側は削平されているが、溝は北側に向かって浅くなっている。これまでの藤崎遺跡での調査例では西側に陸橋部がつくことが多く、本遺構も削平された部分に陸橋があったと考えられる。溝の規模は幅1.4~2.1m、深さ0.6m、断面形U字形を呈する。埋土の下層は暗黄褐色砂、上層は黒色砂が堆積する。北辺は1m分を検出した。東側と西側は削平をうけている。溝の規模は幅0.5m、深さ0.2m、断面形U字形を呈する。埋土は暗黄褐色砂が堆積する。遺物は埋土から弥生上器、上師器等が少量出土した。

埋葬主体は5基検出した。SX001は木棺墓、SX014は土壙墓、SX007、008、009は箱式石棺墓である。主軸方位はいずれも東西をとる。遺構の時期は出土遺物が少ないが、布留式の古段階に位置づけられる。

#### SX001 (Fig. 16)

台状部の北側に位置し、主軸方位はN-94°-Eをとる木棺墓である。墓壙の上面には黒色砂が覆つており、それを掘り下げて墓壙を検出した。黒色砂から完形に近い上師器高環、小型丸底壺、小型器台が出土した。これらは木棺の真上に位置しており、埋葬後に副葬されたものと考えられる。墓壙の東側の上面で赤色顔料が混ざった砂を検出した。墓壙は平面長方形を呈し、長さ3.3m、幅1.9m、深さ0.3mを測る。木棺は墓壙の東から80cm、西から80cmの位置に設置される。土層観察から木棺は組み合わせ式で、長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。棺底は東側の方が高い。棺内の中央から東側には赤色顔料が撒かれている。人骨は遺存していないかったが、頭位は東向きと考えられる。

墓壙の西側には不整楕円形の掘り方の柱穴(P005)がある。柱穴の埋土は汚れた砂をほとんど含まない灰白色粗砂である。長軸長125cm、短軸長106cm、深さ116cmを測る。柱痕は径20cmを測る。柱の位

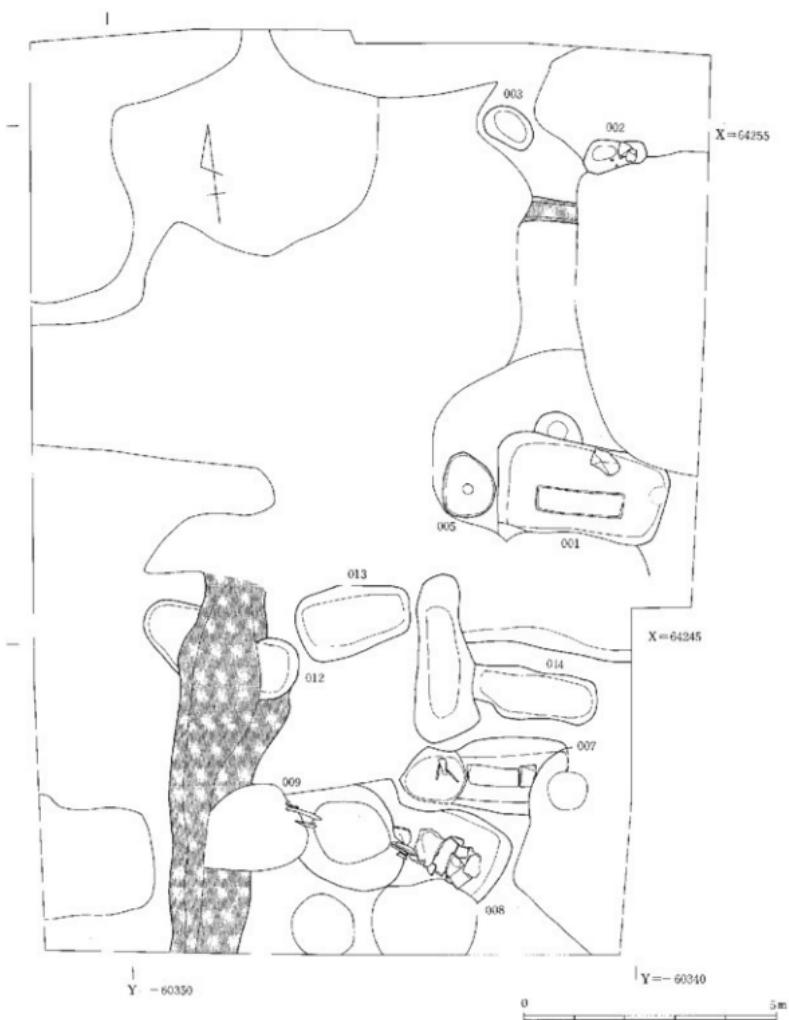


Fig.15 方形周溝墓遺構実測図 (1/100)

置は木棺の中軸線上に位置しており、木棺を意識した柱と考えられる。柱穴の掘り方からは銅鑑が2本出土した。

#### SX014 (Fig.16)

台状部の中央、SX001の南側に位置し、主軸方位はN-100°-Eをとる上壙墓である。遺構の西側は搅乱をうけている。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ約2.5m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。棺底は東側の方が高い。墓内の中央からやや東側の位置で、ガラス製小玉を33個検出した。埋土の洗浄中に検出したため、原位置は不明確である。人骨は遺存していなかった。

#### SX008 (Fig.17)

台状部の南側、SX007の南側に位置し、主軸方位はN-123°-Eをとる箱式石棺墓である。遺構の西側と南側に大きな搅乱をうけている。墓壙は平面長方形を呈し、長さ2.4m以上、幅1.5m以上、深さ1.0mを測る。棺は側壁に厚い板石を各2石、小口に薄い板石を1石配置する。西側は消失している。東側の小口は側壁の両側にはみ出るように配置される。内法の規模は東小口の幅0.4m、長軸長1.5m、深さ0.4mを測る。蓋石は3石遺存するが、棺の長さから4石使用されていたと推測される。棺内は東側から西側に向かって狹まる。棺内の中央から東側には赤色顔料が撒かれている。東端には頭骨の一部が遺存しており、頭位は東向きと判断される。

#### SX007 (Fig.17)

SX014の南側に位置する箱式石棺墓である。遺構は東西の小口側に大きな搅乱をうけており、蓋石及び側壁、小口の石は抜き取られ、棺底の敷石のみ遺存する。主軸方位はN-97°-Eをとる。墓壙は平面長方形を呈し、長さ2.3m以上、幅1.4m以上、深さ0.4mを測る。敷石は墓壙底から10cmの位置に、薄い板石を2枚並べている。東側は搅乱のため、破壊されている。また、西側の搅乱には棺材の板石が廃棄されていた。敷石の現存長約1.4m、幅約0.4mを測る。棺底には赤色顔料が付着していた。

#### SX008 (Fig.17)

SX008の西側に位置し、主軸方位はN-116°-Eをとる箱式石棺墓である。遺構は大半が搅乱をうけており、側壁のみ遺存する。側壁は薄い板石が各1石のみで、現存する内法は長さ0.7m、幅0.2m、深さ0.25mを測る。

SX015は方形周溝墓の西側に位置する。周間に溝は確認できず、単独の墓と考えられる。出土遺物がないため、時期は決め難いが、方形周溝墓と同時期の古墳時代初頭に位置づけられると考える。

#### SX015 (Fig.17)

主軸方位はN-2°-Eをとる木棺墓である。上面は搅乱をうけており、棺の下面近くで検出した。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、長さ2.2m、幅1.1m、深さ0.4mを測る。木棺は墓壙の北から30cm、南から20cmの位置に設置される。土層観察から木棺は組み合わせ式と考えられ、長さ1.8m、幅0.6mを測り、深さ0.1mが残存する。棺底には薄い板石が北側のみ敷かれている。棺内の中央から北側には赤色顔料が撒かれている。人骨は遺存していなかったが、頭位は北向きと考えられる。

**周溝出土遺物 (Fig.18-1)** 1は高环の坏部である。口縁は中位で反転して外反する。器面はヘラミガキが施される。口径33.8cmを測る。

**SX001及びP005出土遺物 (Fig.18-2~7)** 2~5は土師器である。2、3は小型丸底壺である。体部は扁球形を呈し、口縁は内湾気味に開く。外面には細かいミガキが施される。口径13cm、11cmを測る。4は小型器台である。口縁は緩やかに外反し、脚部は直線的に開く。器高8.8cm、口径9.2cm、

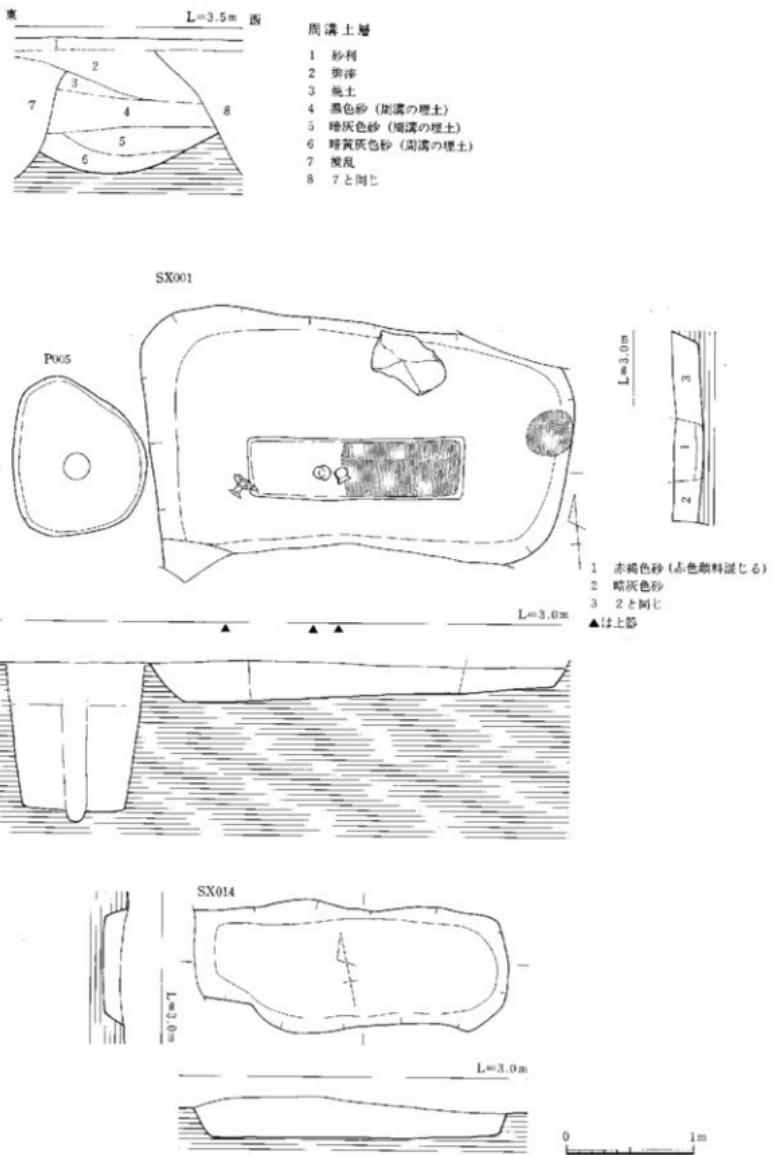


Fig.16 周溝土層及びSX001、014遺構実測図 (1/40)

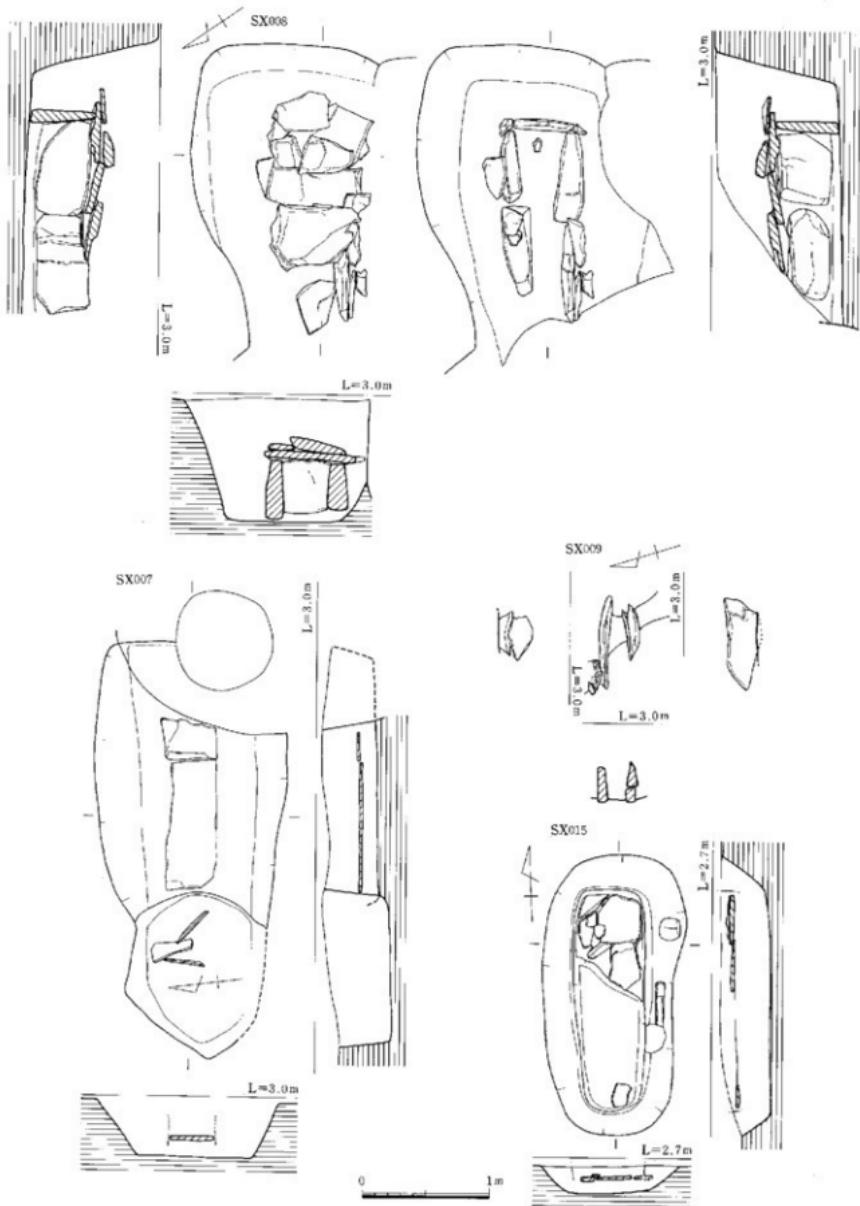


Fig.17 SX007、008、009、015造構実測図 (1/40)

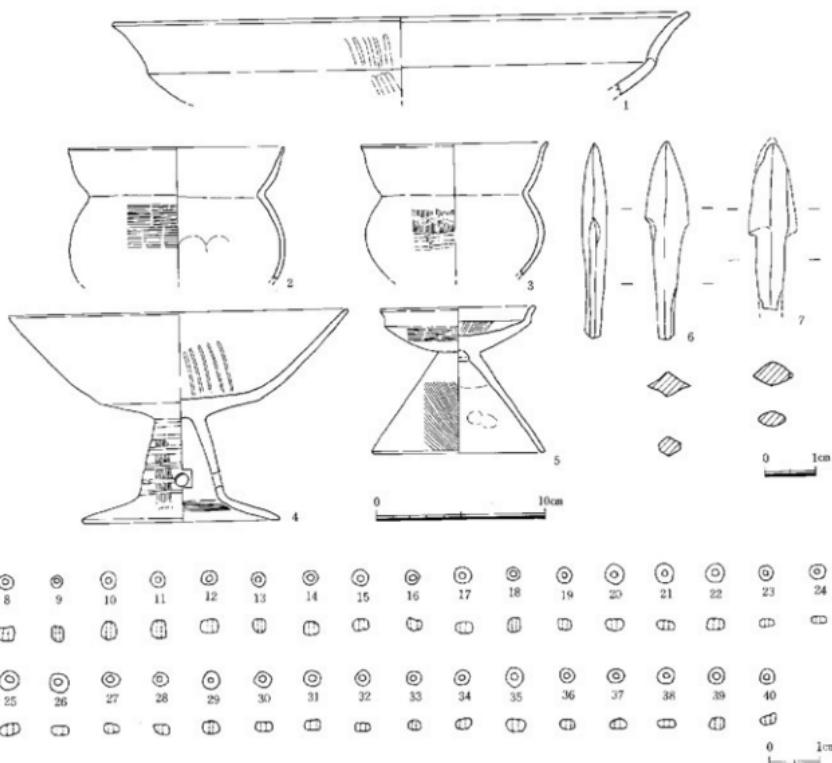


Fig.18 周溝及びSX001、014出土遺物実測図 (1/3、1/1)

底径10.2cmを測る。5は高壺である。口縁は下位で屈曲して直線的に聞く。外面は横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキが施される。脚部は裾で屈曲し、その部分に円形の透かしが施される。外面には横方向のミガキが施される。外面には赤色顔料が塗布されている。器高12.4cm、口径20cm、底径11.8cmを測る。6、7はP005から出土した有茎式の銅鎌である。6は完形で、鎌身部は断面菱形を呈し、逆刺はつかない。茎部の側面は研がれて、断面六角形を呈する。長さ3.9cm、幅0.9cm、鎌身部の厚さ0.5cmを測る。7は先端と基部、逆刺の部分を欠いている。鎌身部は断面菱形を呈し、逆刺は鈍い。残存長3.3cm、幅0.8cm、鎌身部の厚さ0.4cmを測る。

SX014出土遺物 (Fig.18-8~40) 8~40はガラス製の小玉である。径0.2~0.4cm、厚さ0.1~0.4cmを測る。

## 2) その他の出土遺物

本調査地点は近現代の搅乱のため、遺構の遺存状態は極めて悪かった。しかし、近現代の廃棄土坑には弥生時代～古墳時代の遺物が多く含まれていた。ここではその中で、特筆すべき遺物について報告する (Fig. 19, 20-41-70)。

41～58は大型の鉢、壺形土器で、甕棺と考えられる。大半がSX008の東側の廃棄土坑から出土した。出土状況から瓦礫や薬品の瓶等と同時に廃棄されたと判断される。土器は完形に復元できるものはほとんどないが、10数個体以上が存在する。以上の状況からこれらの土器は昭和5年に工事中に出土した甕棺の可能性が高い。41は鉢形土器である。体部の下半は欠損している。口縁は緩やかに外反し、端部の上下端に刻目が施される。体部の上位には段がつき、刻目が施される。器面には横方向のミガキが施される。口径38cmを測る。42、43は内傾する頸部に緩やかに外反する口縁がつく。口縁外面は粘土帶貼り付けで肥厚する。器面は風化しているが、赤色顔料が塗布されていたと考えられる。口径35cm、40cmを測る。44は前者と同様の器形であるが、口縁端部を打ち欠いている。器面は風化しているが、赤色顔料が塗布されていたと考えられる。口径37cmを測る。45は内傾する頸部に緩やかに外反する口縁がつく。口縁外面は粘土帶貼り付けで肥厚する。口縁端部は打ち欠いている。胴部ははほとんど張らず、肩部にはミガキによるかすかな段とその上位に2条の沈線が施される。口径36cmを測る。46～49は肩部で打ち欠いたものである。胴部は張り、肩部にはかすかな段がつく。49は有文の壺形土器で、肩部に上下4本ずつの沈線で区画された文様帶に複線の山形文がヘラ描きされる。50～57は底部である。54は遺構面から出土したもので、中型の壺と考えられる。いずれも平底である。底径12～13cmを測る。56は厚い平底で、器面には赤色顔料が塗布されている。58は遺構面から出土した金海式の甕棺である。口縁内面は肥厚し、端部の上下端には刻目が施される。

59～65は小型の壺である。廃棄土坑や遺構面から出土したものである。副葬の小童と考えられる。59は緩やかに外反する。口径9.8cmを測る。60の口縁は緩やかに外反し、口縁外面は粘土帶貼り付けで肥厚する。肩部にはミガキで強調された段がつく。胎土は精製されたもので、淡黄褐色を呈する。口径8.6cmを測る。61は内傾する頸部に短く外反する口縁がつく。器面の内外面に粗い横方向のミガキが施される。口径9.8cmを測る。62は口縁と底部が欠損している。胴部中位に最大径をもち、肩部には1条の沈線が施される。63の口縁は欠損しているが、口径はあまり大きくない器形である。胴部中位に最大径をもち、肩部には2条の沈線が施される。沈線の下位にはかすかな段がつく。底部は平底である。器面には粗いミガキが施される。底径6.8cmを測る。64は下彫れ気味の底部である。底部は薄い平底である。底径6.2cmを測る。65は円盤貼り付けの底部である。底径6.0cmを測る。

66は遺構面から出土した。口縁は直立し、端部は丸く仕上げられる。体部はやや張りをもつ。外面の調整はナデ、内面は擦過痕が見られる。胎土には砂粒を多く含む。色調は淡赤褐色を呈する。口径13.4cmを測る。無文上器の可能性がある。

67は注口付きの弥生土器壺である。注口は欠損しているが、穿孔が残る。体部は下半に張りをもち、底部には脚がつくと考えられる。口縁は欠損している。吉武遺跡や比志遺跡の中后期～後期の時期に類例が見られる。68は大型の甕形土器である。口縁はくの字形に折れる。端部にはハケメ原体による山形文が施される。口径44cmを測る。69は有茎式の銅鐵である。鎌身部は断面菱形を呈し、逆刺はつかない。長さ3.9cm、幅1.0cm、鎌身部の厚さ0.4cmを測る。70は方形周溝墓の北辺の北側から小型丸底壺である。体部は扁球形を呈し、口縁は直立する。口縁外面には縱方向の暗文風のミガキが施される。口径8.0cmを測る。

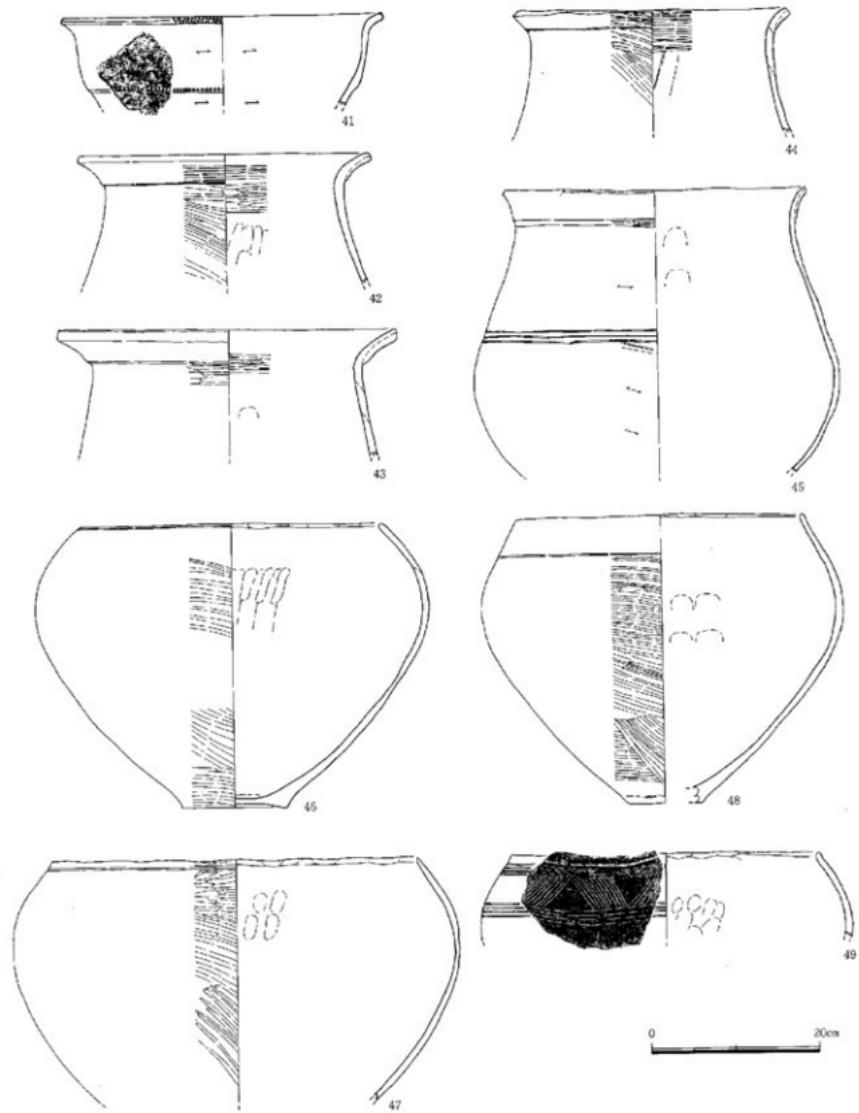


Fig.19 その他の出土遺物実測図 1 (1/6)

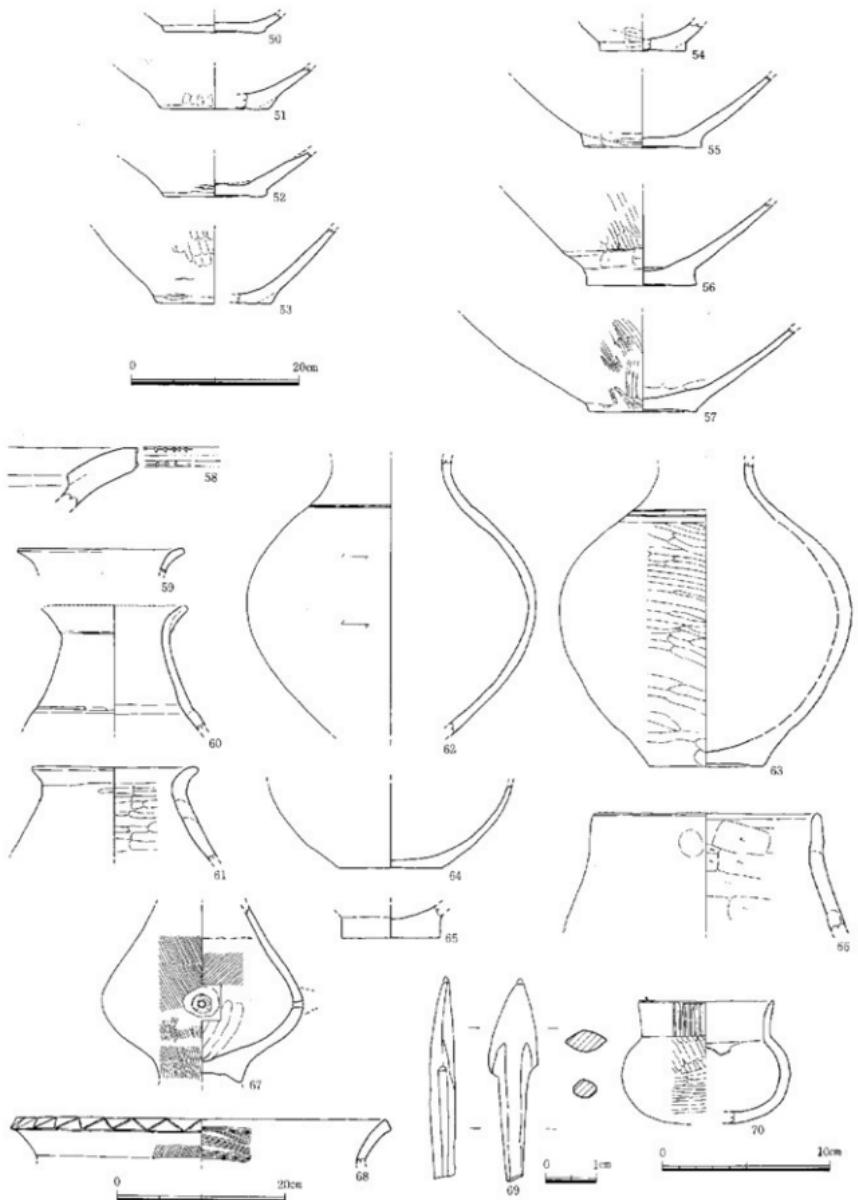


Fig. 20 その他の出土遺物実測図 2 (1/6, 1/3, 1/1)

## 4. 小結

本調査地点は先述のとおり、1917（大正6）年に方格溝文鏡を副葬した箱式石棺墓が発見され、また、1930（昭和5）年に土取り作業中に箱式石棺墓、甕棺、弥生土器が多数出土した場所である。これらの成果は中山平次郎氏、永倉松男氏、鏡山猛氏によって報告され、その後、福岡市教育委員会の報告書の中で出土地点が整理され、藤崎遺跡第2地点として周知されている。今回の調査はこれまでの工事による搅乱が著しく、本来の造構面を留めている場所がほとんどなかった。しかし、搅乱が及んでなかった遺構や近現代の廃棄土坑等からこれまでの発見に関わる重要な資料が得られた。ここでは調査成果を概述し、問題点を整理していきたい。

### 1) 方形周溝墓について

**規模** 今回の調査では1基の方形周溝墓を検出した。搅乱が多く、周溝は西辺と北辺の一部を検出したに過ぎない。北辺は遺存状況があまりにも悪く、周溝としては不確定要素がある。西辺は北側に搅乱をうけている。しかし、周溝底が北側に向かって高くなっている。周溝は北側で立ち上がり、陸橋部を形成するものと考える。藤崎遺跡ではこれまでに15基の方形周溝墓が検出されているが、大半が西側に陸橋がつくもので、本例もその蓋然性が高い。方形周溝墓の規模は東、南辺が確認されていないため不明確だが、台状部の幅は15m程度のものではないかと考える。藤崎遺跡ではこれまでに大型（21~22m）、中形（12~16m）、小形（10m以下）の3つに大別される方形周溝墓が検出されているが、本例は中型の部類に属するものである。

**埋葬主体** 埋葬主体は5基検出した。箱式石棺墓3基、木棺墓1基、土壙墓1基となる。主軸方位は若干の差はあるが、いずれも東西方位をとる。そのうち、箱式石棺墓SX007、009は搅乱のため、大半が破壊されている。SX007は東側を瓦組の井戸に切られており、近世から近代にかけて破壊されたものと考えられる。石棺の長さは約2m前後と考えられる。SX009は両小口が抜き取られているが、長さは約70cm前後と考えられる。箱式石棺墓SX008は西側の小口が抜き取られているが、遺存状況は比較的良好である。棺内の東半部（頭位側）に赤色顔料が撒かれている。石棺の長さは約1.5mと考えられる。木棺墓SX001は組み合せ式の木棺で、内法の長さ約1.7m、幅約0.5mを測る。棺内には東半部に赤色顔料が撒かれていた。また、木棺の検出面から30cm上面で供獻と考えられる高壇、小型丸底壺、小型器台が出上した。時期は布留式古段階に位置づけられる。土壙墓SX014は今回の調査で唯一、副葬品を持つもので、ガラス玉33個が出上した。この墓では他の主体部のような赤色顔料は認められなかった。長さ約2.5m、幅約0.9mを測る。

一方、木棺墓SX001の西側で検出した柱穴は木棺の中軸線にあり、この墓に伴うものと考えられる。柱穴の深さ約120cm、柱痕の径は約20cmを測る。周囲にはこれ以外の柱穴は検出できなかった。市内では比恵遺跡36次調査地点で庄内式期の方形周溝墓（SD01）のコーナー部分で、径60cmの木柱が検出されている。また、古墳に伴う柱穴の検出例では埴丘や周濠に樹立させた鳥形、笠形等の木製埴輪の支柱や主体部を覆う建築物等が想定されている。しかし、本例では柱穴の配列等から埴丘の外衣施設や主体部に伴う建築物等は想定し難く、主体部の脇に単独で樹立していた木柱と考えられる。木棺の上面には土器の供獻が行われており、埋葬後の儀礼行為が想定される。土生田純之氏による古墳の木柱の研究によれば、木柱に靈魂の依代的な役割を想定しており、本例もそうした性格のものへの可能性がある。今後の類例を待ちたい。

**第2地点出土箱式石棺墓** 本調査地点ではこれまでに箱式石棺墓の出土例が報告されている。今回の方形周溝墓とこれらの箱式石棺墓の関係を見ていくと、永倉氏、鏡山氏が報告した1930（昭和5）

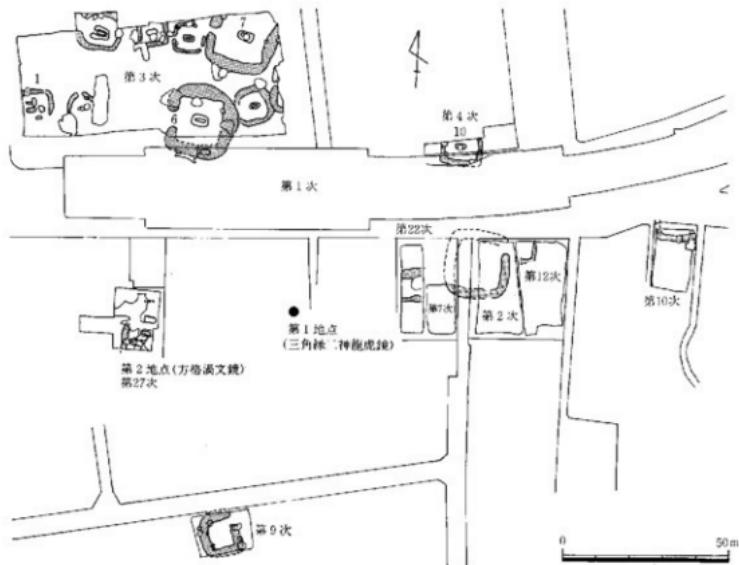


Fig. 21 藤崎遺跡群方形周溝墓分布 (1/1500) (藤崎IVより一部改変)

年に出土した小形の箱式石棺墓（内法長二尺三寸、幅六寸）は、甕棺墓が出土した地点から西に約五十間位とある。しかし、発掘の範囲が東西十間という記述や出土地点を記した図面等から、五十間は誤りで、十間であったと考えられ、神社の境界からは図面によると十間程西となる。また、鏡山氏の聞き取りによると、その箱式石棺墓の西南側に方格溝文鏡を副葬した、長さ2mで南北方位の箱式石棺墓が、更にその西南側に東西方位の中型の箱式石棺墓が位置したとある。今回検出したSX009、SX007は既に発掘されており、当初、これらの箱式石棺墓に相当するものと考えたが、主軸方位や位置関係から方形周溝墓の西側に位置することとなる。中山平次郎氏の報告にもこの場所ではそれ以前にも石棺の出土があり、また、今回の調査で擾乱から多数の石棺材が出土していることから、SX007、009は未報告の箱式石棺墓であったことが推測される。それでは方格溝文鏡を副葬した箱式石棺墓があつたと考えられる西側については擾乱が著しく、箱式石棺墓や周溝は確認できなかつた。従つて、これらの箱式石棺墓群に周溝が巡るかは不確定であるが、方形周溝墓の主体部であった可能性は高い。

**藤崎遺跡の方形周溝墓** 藤崎遺跡ではこれまでの調査で15基の方形周溝墓が確認され、今回検出した方形周溝墓を加えると、16基となる。本調査地点の東にある藤崎遺跡第1地点では明治45年に仿製三角縁二神龍虎鏡が箱式石棺墓から出土しており、これも方形周溝墓の主体部であった可能性が高い。未調査の部分もあるが、20基以上の方形周溝墓が存在したと考えられる。現在確認されている方形周溝墓の分布を見ると、中央の空白地を挟んで、南北に大きく二群分けられる。中央には弥生時代の甕棺墓群が分布しており、方形周溝墓はこれらを避けるように築造されていることが分かる。北群は4次調査地点から3次調査地点にかけて東西の列が見られる。この群は更に2から3列の小群に分けら

れる。埋葬主体は大半が1基であるが、西端に位置する1号方形周溝墓では5基の埋葬主体が確認されている。北群は西側から東側に向かって造営されたと考えられ、1周溝複数主体部から1周溝1埋葬主体部という過程が想定されている。一方、南群では10次調査地点から27次調査地点にかけて東西の列が見られる。また、南側に離れて9次調査地点で1基分布する。南側は主体部が確認された例が少ないと、今回の方形周溝墓は複数の埋葬主体をもつものである。本例も墓群の西端に位置し、複数埋葬主体部をもつもので、北群と同様の変遷も想定できる。副葬品では北群では6号方形周溝墓の主体部の木棺墓から三角縁二神二車馬鏡が、7号方形周溝墓の周溝から珠文鏡、10号方形周溝墓の主体部の木棺墓から変形文鏡が出土している。南群では先述の第1地点で仿製三角縁二神龍虎鏡、第2地点で方格満文鏡が出土している。南北の方形周溝墓群は調査例に差があり、細かな比較はできないが、北群の埋葬主体部には木棺墓が多く、南群には石棺墓が多いことに気づく。現状では両群とも構造、規模、副葬品に大きな相違は見出しがたく、主体部の違いが何に起因するか定かではないが、周辺の調査例の増加を待って検討したい。

## 2) 蔕棺墓について

今回の調査では遺構面や近現代の廃棄土坑から弥生時代前期の蔚棺が多数出土した。1930(昭和5)年の工事では合わせ口の蔚棺墓が6、7基出土し、鏡山氏らが到着したときには既に蔚棺は搬出され、副葬の小壺のみが残っていたとされる。この小壺は現在、九州大学考古学研究室に保管されており、板付I式の指標とされている土器である。蔚棺墓については森本六爾氏の実測図によって知られるのみで、詳細は不明であった。今回の調査ではSX008の東側の廃棄土坑から十数個体の蔚棺が出土したが、これらは個体数や森本氏の実測図の蔚棺との類似点から昭和5年に出土した蔚棺と考えられる。蔚棺の相互の組み合わせは確定できないが、壺形土器は完形品を使用したもの、口縁端部のみ打ち欠いたもの、頸部で打ち欠いたものが見られる。特徴を例挙すると、壺形土器の口縁は外面が肥厚する。肩部には段をもつ。46、47は肩部近くに最大径をもち、張りがあるが、45は胴の張りではなく、肩部の段の上位に2条の沈線を施している。遺構面から出土した48は肩部に山形文をヘラ描きしたものがある。鉢形土器は胴中位に段をもち、口縁と段に刻目を施すものである。口縁形態や胴部の張りなどに新しい要素を持つものがあるが、概ね、板付I式からII式の古段階に位置づけられるものと考える。これらの蔚棺と小壺の関係であるが、藤崎遺跡ではこの段階、土墳墓に副葬した例もあり、すべてが蔚棺に副葬したとは言い難いが、蔚棺墓に副葬したものもあったと推測する。蔚棺と副葬小壺の関係は改めて詳細に検討していくたい。

藤崎遺跡でのこの段階の出土例を見ると、本調査地点の北側で行われた5次調査地点では2基の蔚棺墓が出土している。第101号蔚棺墓は夜臼式の丹塗りの壺を用いたものである。第102号蔚棺墓は合わせ口で、板付II式の特徴をもつものである。本調査地点では金海式の蔚棺も出土しており、夜臼式段階から弥生時代前期を通じた墓地群の存在が想定できる。この他、第1次調査の第66、67号蔚棺墓、第2次調査のST04、第13次調査のST01等がこの段階のものと考えられる。出土例を見ると、本調査地点周辺と東側にある第2次調査地点周辺に分布の中心があることが分かる。第2調査地点の東では夜臼式の彩文土器も出土しており、藤崎遺跡での墓地群の形成は夜臼式段階に始まったことが分かる。早良平野では夜臼式から板付I式、II式の古段階の蔚棺墓群が田村遺跡、重留遺跡、東入部遺跡で検出されている。田村遺跡第5次調査では18基の蔚棺墓が検出されている。これらの蔚棺墓は大半が板付I式の特徴をもち、短い時間内で形成された墓地群と考えられている。今回の蔚棺墓も田村遺跡等の例に共通し、早良平野内の縄文時代末から弥生時代初頭の墓地の展開を考える上で重要な資料と言える。



PL.10 藤崎遺跡第27次調査地点  
出土石棺材（東から）



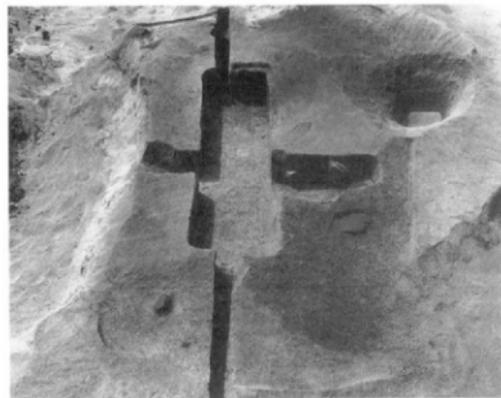
PL.11 藤崎遺跡第27次調査地点  
北側全景（西から）



PL.12 SX001上面遺物出土状況  
(南から)



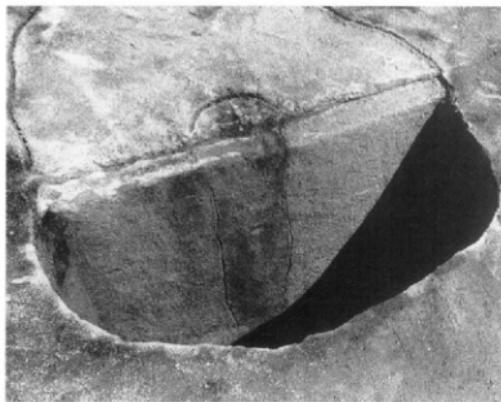
PL. 13 SX001木棺検出状況  
(東から)



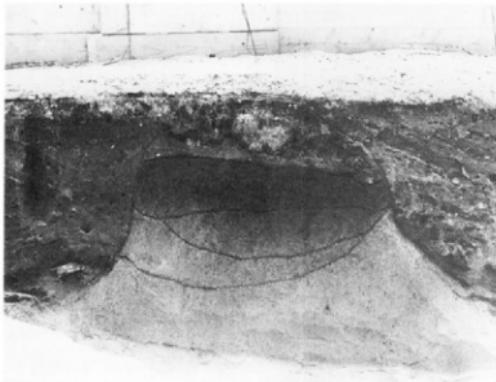
PL. 14 SX001木棺完掘 (東から)



PL. 15 SX001木棺掘り方完掘及  
びP005完掘 (東から)



PL. 16 P005柱痕跡検出状況  
(南から)



PL. 17 方形周溝墓土層堆積状況  
(北から)



PL. 18 SX007～009、014検出状況  
(西から)



PL. 19 SX007、008、014検出状況  
(東から)



PL. 20 SX007～009、014完掘  
(西から)



PL. 21 SX008検出状況(南から)



PL. 22 SX008検出状況（西から）



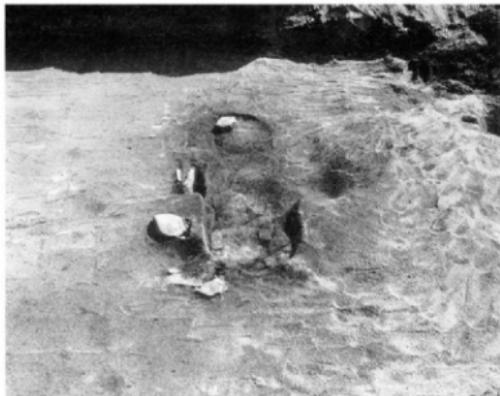
PL. 23 SX008完掘（西から）



PL. 24 SX009検出状況（南から）



PL. 25 SX015木棺検出状況  
(北から)



PL. 26 SX015木棺完掘 (北から)



PL. 27 SX015掘り方完掘  
(北から)

---

野方岩名隈 1  
藤 崎12

福岡市埋蔵文化財調査報告書第573集

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 川本印刷株式会社  
福岡市博多区博多駅南5-6-18

---